

安

心

至心に深く信ず

如来の外に我心靈を摂取し給ふものなし　イノチとタマシヒ
とをまかせ奉る　如来は生命のミオヤ心靈のミオヤ救ひのミオ
ヤなりと信じ奉る

至心に深く愛す

如来の外に心靈を愛護養育し給ふものあることなし　故にす
べてのものに超えて如来の大なる聖寵を愛樂し奉る

至心に深く欲望す

きよきみ国は真善美の至極の処きよき処に於てミオヤの世つ
ぎたらんことを欲望し奉る

安心と起行

前には通じて仏教を本として、人生の帰趣の理を理論として演べた。是よりは実地宗教的に生命の信仰生活に入る道を明さんと欲す。人生の一大事たる宗教心を立てんには先づ安心と起行といふことを確と定め置くべきである。

安心とは信仰の主義と目的とが決定すること。起行とは、其の目的に向つて実行することである。未だ目的定まらずして何に向つて行かれやう。是れ安心を立つべき要にして。歩を運ばざれば自己が目的の地に達することが得られない。是れ起行を要する所以である。

安心を立つるに三条あり。一つに所求の目的。二つに帰命信頼の尊体。三つに目的に到達する行法。

更に云はば、一に何を目的として信仰を為すか。二何なる靈体に帰命信頼すれば、

己おのれを救すくひ下くださるゝか。三さんに如何いかなる行ぎやう法ぽうによりて目的もくてきに達たつし得えらるゝか。是これに答こたへて一いちに絶ぜつ対たい永えい恒えんの靈れい国こくに入いつて永えい遠えんの生せい命めいと常じやう住じゆうの平へい和わを得うるを目的もくてきとす。二にに永えい恒えんの安あん住じゆうを得うるは大おほ御み親おやに帰きま命めい信しん頼らいするに在あり。三さんに大おほ御み親おやの聖せい意いに契かなふ意いと行おこなひとを能よく心こゝろ得えて之これを实じつ行かうす。此この三さん条じょうが確たしかに定さだまつて、实じつ行かうするのが即すなはち安あん心じん起き行ぎやう出来きたのである。

言いひ換かふれば、宗しゆう教かう心しんは一ひとりの大おほ親おやを信しん頼らいし、自じ分ぶんは子こなれば、ミオヤの聖みめく龍りゆうを受うけて、ミオヤの完ま了りょうが如ごとくに、自じ己この全まつたことを欲よく望ぼうし、之これを实じつ行かうして行ゆくが即すなはち宗しゆう教かう心しんである。故ゆゑに先まづ一ひとりのミオヤを信しんずべきである。

大 ミ オ ヤ

ミオヤは、宇う宙ちゆう唯ゆい一いつの独どく尊そんで在あります。然しかれども、一さい切しつ衆じゆう生じやうの為ために、三しん身しんと分わかれて一さい切しつの世せ界かいと及および衆しゆう生じやうを生せい産さんし、また靈れい界かいに摂せつ取しゆし給たまふ。故ゆゑに略りやくして三しん身しんを説せつ明めいせ

ば、

法身ほつしん。宇宙全体うちゅうぜんたいが即ち法身の体たいである。故に宇宙は絶対の大靈ぜつたいたいれい、永恒えいがうに活ける如来にょらいである。哲学てつがくでは、実体じつたい又は真如等しんにょうとうと呼んで居るけれども、宗教的しゅうけうてきに、表号へうがうせば、法身ほつしんビルシヤナ如来にょらいと云ひ、即ち地水火風の四大だいだいと識大しきだいとの物質ぶつしつと心質しんしつとの統一とういつ的存在そんざいであつて一切万法さいまんぼふの大原則だいげんそくである。故に法身ほつしんと云ふ。又如来自己またにょらいじこの中に一切無辺さいひへんの性しやう徳とくを包蔵ほうざうして一切万物さいばんぶつを産み出すから如来藏性にょらいざうしやうとも云ふ。密家みつけでは胎藏たいざうの大日だいと名づく。天地万物てんちばんぶつは実体じつたいなる大日だいの胎内たいないから産出さんしゅつされたのである。

一大法身だいほつしんが大ミオヤにて万物ばんぶつは大小だいせうとなく悉く皆子みなこである。故に太陽たいやうや地球ちきう其他そなたてん天体たいの星宿せいしゆくも皆小法身せうほつしんである。乃至地上ないしちじやうの動物どうぶつも植物しょくぶつもすべて活ける物ものとして小法身せうほつしんたらざるはない。大法身だいほつしんが大造物主たいざうぶつしゆとすれば小法身せうほつしんは皆小造物者みなせうざうぶつしやである。一切さいの動物どうぶつも植物しょくぶつも子を産み生殖せいしよくの作用さようを為すなを見ても知るべきである。

一切衆生さいしゆじやうは小造物者せうざうぶつしやたると共に靈性れいせいを伏藏かくざうする故に仏ゆえに成り得らるる性せいを具ぐしてゐ

る。靈性は具有すれども未だ卵子である。此を孵化せざれば雛子と為ることが出来ぬ人の靈性をあたためて仏子の徳を開発し靈化する権能は報身如来にある。

報身如来。法身は宇宙全体にて報身は其の中心である。太陽が自然界の万物を照す如くに、報身如来は心靈界の大光明者である。物質の万物は太陽の力に依らざれば生存が出来ぬ。衆生の靈性は無量光如来の一大靈力に依らざれば、心靈を開発し靈化して聖き人としての生存が出来ぬ。報身如来は宇宙最高の光明界に在して、普ねく十方世界を照して衆生の信念する者を攝取して光明の生命と為し給ふ。

如来は衆生摂取の光明常へに照し給へども、迷ひの衆生等には無明に眼亡じて、之を識るの由がない。然してミオヤの大なる慈悲は迷没の子等を愍み、釈迦牟尼の已前に、往昔法蔵菩薩の身を受けて一切の子等を常住の平和なる常楽世界、即ちミオヤの御許に還るべき道を建てなされた。此れが為めには無量の苦難を嘗めて衆生を大安全の靈国に入ることゝ為た。此れ即ち弥陀の本願である。御親が総ての子等が自己の許

を離れて六道の他郷に彷徨へるを愍み御許に帰復せしむる道を開き為されたのである
ミオヤの御許が衆生終局の帰着処である。之れを經に一切衆生、本法身より出でて
法身に還らざるはなし、と説きなされた。此の經の法身と今の報身とは体は同一であ
る。御親のみさとを迷ひ出して、再び御許に還ると云はば、覺りの上から迷ひと為り
また覺の身に還ると云ふ様に思ふなかれ。本と法身から産出されたのは卵子である。
報身の智慧と慈悲との光りに暖ためられずんば、仏性が孵化することは出来ぬのであ
る。若し仏性が開發する時は父子相迎へ親子の対面が出来る。靈性が開けて見れば、
法界処として蓮華藏世界ならざるはない。常樂我淨、四徳莊嚴に充たされて居る。

ミオヤの御許は宇宙間の一局部に座を卜して在すのではなく、実には彼世界の相は
三界の道に勝過して畢竟して虚空の如く廣大にして辺際なしである故に、衆生靈の眼
が開けて見ればミオヤの在ます衆宝莊嚴の淨土が現前する。

其御許を無量光明土とも又涅槃界とも寂光土とも種々の美しき名を以て表され

て居る。ミオヤは報身として心靈界に儼臨し給ふ。一切の子らを本国に還らしむる契法として現はれ給ふ靈体に在ます。

法身より世界の方面に産出せられて靈性具有すれども未だ開顯せずして六道に流転する間を六凡の衆生と名づく。報身の光明によりて撰取せられ、仏性が開顯し正しく父子相迎の上に円満に仏性が成就して無上覺位に到り終局に達したるが即ち仏陀と爲る。即ち十方三世の諸仏である。

一切諸仏は悉く弥陀の光明に依りて正覺を成じなされたのである。般舟經に三世諸仏念弥陀三昧に依て正覺を成ぜりと説いてある。

弥陀は十方三世一切諸仏の本仏にして普く十方世界を照して念仏の衆生を光明中に撰めて浄め給ふ。

一切諸仏は各自の世界に於て、其国の衆生の爲に教へて、弥陀に帰せしむ。ミオヤは一切の迷子を撰めて聖きに靈育し給ふ靈能は在ませども、無明に迷へる子らには自

らミオヤの在ますことを信しん知ちすることができぬ。

そこで先せん覺かく者しゃの仏ぶつ陀だは、仏ぶつ々く各おの一く世せ界かいを受う持ちつて衆しゆ生じやうを誘いう導だうして弥み陀だに帰きせしむ。一切さいの諸しよ仏ぶつは是これ応おう身しんである。其その国くにの衆しゆ生じやうに應おう同どうした形けい体たいを受うけて言げん語ごも悉ことごとく衆しゆ生じやうに應おう同どうして之これを教けう化くわなさるるのである。

一 応おう身しん。迷まよひの衆しゆ生じやうを教けう示じし誘いう導だうし給たまふ為ために、人にん界がいに出いで給たまふ仏ぶつ陀だにて此この世せ界かいでは釈しゃ迦ぢ牟む尼に仏ぶつ是これである。ミオヤより身みを分わけて現げん世せ界かいに出いて給たまひし応おう化けの釈しゃ尊くそんは中天ちうてん竺ぢく、カピラカピラの淨じやう飯ぼん大だい王わうを父ちちとし摩ま耶や夫ぶ人にんを母ははとして幼えう名めいをシツタルシツタルと号がうし、生うれつき観かん智ち聰そう明めい学がく園えんに遊あそびては五み明めう四し吠べい陀だに精せい通つうし、伎ぎ芸げいの林はやしに在ありては武ぶ術じゆつ射しや御ぎよ等とう習じゆひ給たまふに一ひととして成ならざるはなし。王わう位ゐを嗣つぎて人にん間げんの光くわう榮えい一しん身みに聚あつむべき位ゐ置ちをも老らう病びやう死しの相さうを見みて世よの非ひ常じやうなるを悟さとり国くにと位くらゐとを捨すてて山やまに入りて道みちを勤ごん苦くすること六ねん年ねん、竟つひにマカダ国こくの伽が耶やのヒハラ樹じゆの下もと金こん剛ごう座ざに坐ざし禅ぜん那な三さん昧まいに入いりて一や夜てん天てん魔まの碍さはりを降かう伏ふくし臘ろう月がつ八はち日じつ東とうの天てんに明み星せう輝き出いづる時とき、無む明めいの眠ね夢む醒せいめて朗らう然ぜんとして正しやう覺がくを成じやうじ罪ざい惡あく

の源みなもとを解脱げだつして正覚しやうかくの無量光むりやうくわうと合一がふし、生死しやうじを超出てうしゆつして涅槃ねはんの無量寿むりやうじゆに帰元きげんなされた。仏陀ぶつだ釈迦しやくかは初めて正覚しやうかくの暁あかつきより鶴林かくりんの夕ゆふべに至る迄いたまで、正覚しやうかくの無量光むりやうくわうに帰きし涅槃ねはんの無量寿むりやうじゆに到いたるの道みちを衆生しゆじやうに教おしへなされた。是これすなは即ち応身おうじんである。

ミオヤは凭かく三身じんに分わかれて衆生しゆじやうの子こらを生産せいさんし摂化せつけし給たまふ。法身ほつしんとしては天地万物てんちばんぶつの本体ほんたいとし、また一切さいの万法まんぽうの則のりとして、一切衆生さいしゆじやうを産出さんしゆつし養成やうせいし。報身ほうしんを現げんじては法身ほつしんから受けたる衆生しゆじやうの仏性ぶつじやうの卵子たまごを慈悲じひと智慧ちゑとの光明くわうみやうを以て開發かいはつし靈化れいくわし給たまひて竟つひに仏陀ぶつだの徳とくを成就じやうじゆせしめ。また応身おうじんとしては衆生しゆじやうを教おしへて歸命きみやう信賴しんらいせしめ給たまふ。若し衆生しゆじやうにして法身ほつしんの恵めぐみと力ちからとに由よらざれば、此身心このしんぐを受けまた生成せいじくすること能あたはず。報身ほうしんの靈力れいりよくに信賴しんらいせざれば、靈性れいせいを成熟せいじゆくすること能あたはず。応身おうじんの教おしへに由よらざれば救靈きふれいの真理しんりを知しること能あたはず。

ミオヤの本願

ミオヤは本^{もと}一^{たい}体^{たい}なれども衆^{しゆじやう}生^{せい}の爲^{ため}に三^{しん}身^{しん}に分^{わか}れて生^{せい}成^{せい}し撮^{せつ}取^{しゆ}し給^{たま}ふことは已^{すで}に演^のべたり。尚^なほ報^{ほう}身^{しん}如^に来^{らい}と現^{げん}じて衆^{しゆじやう}生^{せい}を摂^{せつ}めて、ミオヤの御^み許^{もと}に帰^{かへ}らしめ給^{たま}ふ御^{おん}働^{はたら}きにつきて説^とかんとす。

ミオヤの本^{ほん}覚^{かく}自^じ性^{じやう}の御^み許^{もと}は永^{えい}恒^{がう}、本^{ほん}然^{ねん}、絶^{ぜつ}对^{たい}不^ふ可^か思^し議^ぎの靈^{れい}体^{たい}なるも、一^た度^たび絶^{ぜつ}体^{たい}の靈^{れい}界^{かい}を背^{そむ}き相^{さう}待^{たい}なる生^{しやうじ}死^じの方^{ほう}面^{めん}に迷^{まよ}ひ出^だしたる子^こらは、生^{うま}れつき妄^{わう}に向^{むか}ひ覺^{かく}に背^{そむ}き、生^{しやうじ}死^じに順^{じゆん}じて涅^ね槃^{はん}に逆^{さか}らひて居^ゐる。此^{この}意^い向^{かう}心^{しん}識^{しき}を転^{てん}じて正^{まさ}しく反^{はん}对^{たい}の方^{ほう}面^{めん}に向^{むか}はしむるは実^{じつ}に容^{よう}易^いな訳^{わけ}でない。此^{これ}が爲^ために三^{さん}世^ぜの諸^{しよ}仏^{ぶつ}も永^{とこ}しへに聖^{せい}意^いを惱^{なや}まして竟^{つひ}に安^{あん}心^{しん}し給^{たま}ふことのできぬ問^{もん}題^{だい}は此^{こゝ}処^ちに存^{ぞん}す。此^{こゝ}処^ちに仏^{ぶつ}教^{けう}が二^に門^{もん}に分^{わか}れて衆^{しゆじやう}生^{せい}を無^む明^{めう}と生^{しやうじ}死^じの中^{なか}より解^げ脱^{だつ}させよう、また救^{きう}濟^{さい}せんとの二^につに道^{みち}がづくことに成^なる。無^む明^{めう}の迷^{まよ}ひと生^{しやうじ}死^じの苦^くとが無^なかりせば、聖^{しやう}道^{どう}も宗^{しゆ}教^{けう}も必^{ひつ}要^{えう}はない。

教^{けう}祖^そ釈^{しやく}尊^{そん}が人^{じん}生^{せい}問^{もん}題^{だい}に就^{つゐ}て痛^{いた}く煩^{はん}悶^{もん}なされたのも亦^{また}爰^{こゝ}に存^{ぞん}す。無^む明^{めう}は生^{しやうじ}死^じの源^{みなもと}である。無^む明^{めう}と云^いふは吾^ご人^{じん}衆^{しゆ}生^{せい}、那^な辺^{へん}より此^{こゝ}に生^{うま}れ来^{きた}り、また終^{しゆう}局^{きよく}何^{なに}れに向^{むか}つて帰^{かへ}着^{やく}す

べきが眞理なる哉の問題に對して一向闇黒である。自己は本来何物なる哉が自覺できぬ。人生の歸着那邊に在る哉が認められぬ。また一方に生死につきて何人も生を欣び死を嫌ふ。然れども生るれば死は遁るる能はず。吾人の人生の行路、行つまりに出会ふことは何人も定りて居る。然るに何んだか永遠に存在したい様に思はるる。また自己が自分で明かでないから、何とかして自己の本体を明かに覺りたいやうに思はる。闇きに生れて闇きに死んで行くは何か腑甲斐ない。覺りの眼が明けるものならば開いて見たい。また若し永恒に生存出来ることならば不死の身になり度い。是が仏教の根本である。此の問題が解決つく許りでなく實地に正覺の眼が開き永恒の生命を得らるるのが即ち仏教である。

教祖釈迦牟尼が現世界一切の大明明者として、此の眞理を悟り、永恒の生命を得給ふたのである。一切諸仏も悉く円かに此処に到達し給うたのである。釈尊が菩提樹下に於て朗然と大悟して正覺の光明普ねく一切の眞理を徹照し給ひしとき即ち無

明の闇が消へたので大涅槃を得た時が生死を越えて不死永恒の生命を得なされたのである。此処に到達すれば人生終局に帰着したのである。故に仏教の終局目的は必ず無明の眠から醒めて正しく覺りの光明を得て無限の宇宙が全く我有となり、生死を超えて涅槃常樂の生命となるのが歸趣である。

正覚と無量光。仏教の終局無上正覚を成して宇宙一切の真理を覺り涅槃常住に帰着すと云ふ時は是れ聖道門なので、今日謂ゆる哲學的の終局である。若し此を宗教的に見る時は我らが心の闇き凡夫自から覺ることは出来ぬから己が無知無力なることを信じて無量光如來に帰命して如來の光明に攝取せられ光明の人と成る時は即ち諸仏の無上正覚と同一に歸したので、また己が限り有る生命をもすべて、ミオヤに獻げて如來無量壽に歸する時は、有限の生命なる生死を超て自から永恒無量壽の中に入った。是れ諸仏の涅槃と一致するのである。

ミオヤの本願と云ふは宗教的に正覚と涅槃とを得るの道を開きて普ねく一切を摂す

るの道みちを建て下くだされたのを云いふのである。

ミオヤが無むりやうくわう量光りやうくわうを以もつて普あまねく十方ぼうほふかい法界ぽうほふかいを照てらして、衆生しゆじやうを此このくわうみやうちゆう光ひと明中なの人ひとと為なされ給たまふのは、即すなはち哲学てつがくの語ことばで言いはば正覚しやうがくの光ひかりりである。

無量寿むりやうじゆこくど国土こくまに生いると云いふは、哲学てつがくに於おける涅槃界ねはんがいの義ぎである。若もし一切衆生さいしゆじやうに無上むじやう正覚しやうがくを成じやうじ大涅槃だいねはんに証入しやうにふせよと云いふは何人なんびとも容易よういに成就じやうじゆし難がたし。実じつに難中なんちゆうの難なんである。然しかるに若もし無量光むりやうくわう如来にょらいに帰命きみやうし、如来にょらいの光明くわうみやうちゆう中の生活せいくわつと成なることは何人なんびとも得えらるると信ず。無上正覚むじやうしやうがくを成じやうずとは即すなはち正まさしく無量光むりやうくわうを得えたこと大涅槃を証すとは無量寿に合がふ一いつしたることである。

一切諸さいしよぶつ仏ぶつは聖道門しやうだうもん的に正覚しやうがくを成じやうし涅槃ねはんを証しやうすべき道みちより教せしへ給たまひ、ミダは自みづから無む量光りやうくわうを覚さとり無量寿むりやうじゆを得えて自みづから得えたる光くわうみやうちゆう明中しゆじやうに衆生しゆじやうを撰取せつしゆし自みづから証入しやふにふしたる無む量寿りやうじゆに一切さいを証入しやうにふせしむ。ミダは宗教しゆうけうてき的に一切衆生さいしゆじやうのミオヤとして父子ふしの關係くわんけい的に無む明みやうに迷まよひ生死しやうじに苦くるしむ子こらを撰取せつしゆし給たまふ。

ミタは本願成就して慈光普ねく照して衆生を攝取し給ふに、いかなる方法を以てか救済を垂れ給ふ。焉に一切衆生を攝取し給ふ本願に依らざるを得ぬ。本願とはミオヤが一切の子らを慈悲の御手に摂めなざる所の約束である。

衆生を攝取するに四十八願を立て給ふ。此誓願は悉く衆生の為めである。中に就て第十八願が正しく衆生を摂するの誓である。經に設し我仏を得たらんに十方の衆生至心に信樂して我國に生ぜんと欲し乃至十念せんに若し生ぜずば正覺を取らじと。

ミオヤは心光普ねく照して、凭やうな心を以て我を念ずる者を光明中に摂めて、無量寿國に帰らしむるとの義である。故にミオヤの聖意に契合せんには此の三心を具ふべし。然る時は照す光明中に生るることを得ん。是より一心三心の義を演べん。

三 心 の 解

ミオヤの聖意に合ふべき子等が心意の備は至心の形式と信樂欲の内容とを要す。

至心

至心とは、至誠心即ち真実心と導師は釈せられた。

至誠心は何故にミオヤの聖意に合ふ哉と云はば如来の聖意は絶対至純の至誠心である。至誠は如々真々の心真如、宇宙の本体である。即ち自性清淨天真である。ミオヤの子として衆生悉く至誠の仏性を以て心の根底とす。之は俗に謂ゆる本心のことである。

至誠心の本体は真実の自己である。此自己の真面目、天真玲瓏として自性の光りをもて自己の一切の心意を指導するの主体である。

此真我なるものは法身の根底から個人の真髓と為つて頭を此地上に顕はして居る。真心が肉我の煩惱の虚妄な幻影の為に覆はれて居る。恰も真空真天が雲霧に掩はるるやうなものである。生つき皮殻を覆うた我なるものは真実我の実のある我ではない。

此の眞実我でないものを我と認めて居るから迷ひである。虚偽である。眞我を認めざる間は迷妄である。人間は眞実我が顕はれて始めて、人生の価値が有る。宇宙万有の中に独歩して存在するは絶対と連絡して居る眞我あるからである。ここに於て如来を父とし我は子であると云ひ得る。此眞我ありて永遠の生命もあるので虚妄我は本来実のない殻である。実には存在せぬものである。眞我ありて大なるミオヤと調和することが出来る。

若し眞実我が毀て仕舞ふものならば宇宙全体も皆なくなる。眞我は大なるミオヤと合一することをうるのみでなく、宇宙全体も悉く此一個の中に相入り即ち溶け入つて居る。吾人はミオヤの子たる真心あればこそ絶対無限の光と無限の生命とが得らるのである。ミオヤは無量の万徳、円かに備はつたまま此個体の中に溶込うとして居る。実に吾人の心中に相入して在ますのである。凭の如きはミオヤと子と合一し得らるる眞実心である。

眞実心と虚偽心

此個体の自己に絶大なるミオヤの聖心と調和し合一する方と、又相應せぬ方との二面がある。前者を眞実心、後者は虚偽心と云ふ。

本ミオヤより出でたる我心にして、ミオヤに相應する心が眞実心にて相應せざるを虚偽心と云ふ。

眞実の価値。人生の価値あるは眞実心あるからである。吾人は本ミオヤの法身の本体なる懷中に無為に眠りて居つたよりは個体として此世に産出されたのには一の使命を以て派遣されたものと思ふ。

此使命は実は重大なる任務であり且つ永遠の亡と生存との何れかに帰す。

吾人が本来ミオヤの子として純粹の真心ばかりにして虚偽心の皮殻なかりせば幸福ならんと思ふべけれども実は然らず。鉱物中の最貴なる黄金も本鉱垢がついて居る。

植物の実にも皮殻が付て居る。実は此が還つて真我を充実ならしむる本能を有て居るのである。実に生の力を發揮させんには虚仮なる鉱垢を練つて其の效果として真価を顕はすので、そこに苦闘的努力の神聖なることにもなる。

吾人が肉我の虚仮的の皮殻は、果の熟したる上には必ず除去さるべき運命を有つて居る。然るに天然の人は皮殻の心を以て真我と認めて居る。之を解脱して無我になれと云うは生命でも失ふかの如くに失望する。然るに実はさうでないので、それを解脱して無我の真理を教へた仏教は努力して真我の果実を充実せしめて皮殻より脱せよと教へたのに過ぎぬ。

生の真価は無明我より解脱して光明の真我の顕はるる処にあり。また堅き鉱中の純金を練り出すのには非常なる精進力を要す。此の強き精進を為す処にまた貴重なる価値を認めらるるのである。

吾人の真心には靈的円満なる人格、即ち仏と為り得べき性と能とを具有して居る故

此の真心を完成させんが爲めに人生は貴重である。真心が即ち仏性であるから本と尊貴の性ではあるけれども、此性を發揮して完成せざれば能はない。例へば杉樹の種子は果皮に包まれし微かな顆である。其の元素と云ふは炭素や蛋白質などの若干元素の結合物に過ぎぬ。けれども之を地面に播下し芽を發し幹及び枝葉も發展し纏て蒼天を凌ぐ様な大樹となる如く、衆生の仏性も亦然り。自性があらん限りの發展をなし智徳円かに完成したる暁には無限の光と無限の寿を以て万徳円満な仏性が顕はれ来たらん。

杉実の内に若し核の生命なかつたならば、種子は萌發する筈はない。吾人の仏性は頓て仏と成り得べき核である。此核が無限寿の生命の本である。又此種子には自己を充実せんと欲する活ける氣あり、自由あり。杉の種子には自發的生成力を持て居るが如く吾人の仏性は自己を円満な靈格にすべき性である。

枝葉等は外界から注入すべきものではない。種子は皮殻すべてを犠牲として、束縛

を脱して自由の萌発をす。

本来種子は自発的なれども、土地や日光雨風氣候等の資縁によらざれば自己を完成すること能はざる如く吾人の仏性はミオヤより出でて、またミオヤの智慧と慈悲との光明を仰ぐに在らざれば真心の仏性を円満に完成することは出来ぬ。

未だ仏教の真意を解せざる輩は自己の仏性の真心とミオヤの聖意との因縁に依りて眞実の結果として成仏し得るの真理を悟らず、皮殻なる虚仮の肉我を惜しみ、欲望を完たからしめんとし虚妄の名誉また利欲等の為に単なる栄華を貪ぼり、実果なき名利の為に貴重な生と精力とを徒らに勞して人生の帰趣を得ず、空しく六道流転の亡者となる。されば善導大師は、

至誠心。一切衆生身口意業に修する所の解行必ず眞実心中に作すべし。外に賢善精進の相を現はし内に虚仮の心を懐くことを得ざれ。貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性侵め難く事蛇蝎に同じきは三業を起すと雖も、名づけて雑毒の善とす、亦虚仮の行と名づ

く。眞実しんじつの業ごふと名付なづけず。若もし比かくの如ごとき安心あんじん起行きぎやうを作なす者はもの仮令たとへ身心しんしんを苦く励れいしてにちや日夜にちや十二時じ、急きふに走はしり急きふに作なすこと頭燃づねんを灸すくうが如ごとくも衆すべて雜毒ざうどくの善ぜんと名なづく。此この雜毒ざうどくの行ぎやうを廻めぐらして彼かの仏ほとけの淨土じやうどに生しやうずることを求もとめんと欲ほつせば之これ必かならず不可ふかなりと。

微少びせうなる一顆くわから出いでながら蒼天さうてんを凌しのぐ大樹だいじゆと為なりて枝葉しえう花果くわく繁茂はんもする如ごとく、吾人ごじんの仏性ぶつじやうは、円満えんまんに發揮はつきさるる晝あかつきには自己じこしん心しんが如來にやらい心しんに同化どうくわし聖子せいしの徳とくが頭あはれて光明くわうみやう生活せいくわつに働はたらくことが出で来るのである。吾人ごじんの眞心しんしんは自己じこの主体しゆたい即すなはち種子たねであるが、此この性じやうを完成くわんせいせんには必かならずミオヤの恩寵おんちやうを仰あふがなくてはならぬ。ミオヤの恩寵おんちやうと親密しんみつなる因縁いんえんの下もとに内容ないようを充実じゆうじつせしむるにはミオヤを信しんじ、ミオヤを愛あいし、ミオヤの中なかに生いききんとの欲望よくぼうの心しんを要えうす。是これれ即すなはち三心さんしんである。至誠しじやうしん心しんは吾人ごじんが心こころの形式けいしきにて佗たの三心さんしんは内容ないようである。

此この三心さんしんは智ち力りよくと感かん情じやうと意い志しとの三はう面めんより起おこるミオヤに對たいする心しん意いである。

信しん。現げん在ざいの我われは如來にやらいに背そむき罪惡ざいあくなるを自認じにんし、本眞心もとしんしんはもとミオヤの子こなればミオ

ヤと合一して必ず救済せらるるものと信ず。

愛は感情的に、ミオヤと子との親密なる交渉、ミオヤは無上の愛を以て、我を愛し給ふが故に、我はまた衆に超えてミオヤを愛樂し奉つる。

また一切衆生は悉く同胞なれば、また相互に愛し合ふ。

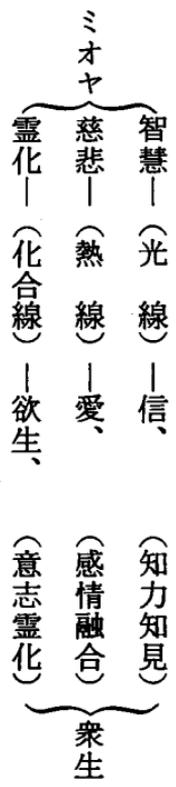
ミオヤを愛する時は、如来と共に同棲し如来を愛樂すること、最深厚なる時は、ミオヤを我有と為さんとの欲望が起る。是欲望は意志の信仰なので、如来と共にあり、聖子たる自己を円満に完成せんとの欲望が起る。自己を完成せんには、一切を犠牲にすることも、甘んじて靈我完成の為には、如何なる苦行も悦びの行為と感ずるのである。

信仰の内容

宗教は、天人合一、神人の感應等を以て定義されてある。即ち宗教的、大ミオヤと

子との關係を親密にするにあり。人の精神に、形式と内容とあり。形式としては、ミ
 オヤは天即ち、宇宙全一の純粹の真心にて、人は其の全一を受けたる至誠心を根底と
 して居る故に、吾人の本心自性が開くればミオヤの心と人の心とが合致するのである
 ことは已に明せり。是からは、ミオヤは天の粹なる中心真髓として、また、一切の子
 らを愛する聖龍から万徳円満の相好光明を現はして、子を愍むの聖意を示し給ふ。
 例へば自然界に太陽と現はれて、地上の一切の生物を生養する如く、ミオヤは心靈界
 の日光として、子らの心靈を靈育し給ふ。

ミオヤが一切の子らに対する恩寵を太陽が地上の生物に及ぼすエネルギーと比例す
 れば。



日光の光線は物質界を照し、ミオヤの智慧は人の靈性に対して仏智見を明にして、信仰の眞理を自覚せしむ。ミオヤの慈悲は子らの苦を抜き樂と与ふる心の最も暖温なる物にて、太陽の熱線に比すべきもの。靈化の力は、太陽の化学線が化学作用を起し植物や動物を活かす働きあるに比すべし。

人生終局の帰趣は、如來より受けたる靈性を開きて永遠の生命、ミオヤから受けたる性を遂げて、ミオヤの許に還り、ミオヤの聖意を我意として子たる本務を竭し、永恒にミオヤと共に在るを目的とす。例へば人間の子とても人間の養育に預らざれば総ての人格は備はること出来ぬ。人の子とても、生れて直ぐに山林に置き野獸に育てらるる時は匍匐して立つこともなく、言語は勿論のこと箸を採つて食することも出来ぬとのことである。吾人が仏の子たる靈性は具有すれども、ミオヤの恩寵に靈育せられざれば、靈徳の具はりたる人格とは成ることは出来ぬ。ミオヤの恩寵を蒙るには信と愛と欲との三心を要する。初めに信、即ち知力的の信仰の義を明さん。

信

先づ宗教の道を求め、正しくミオヤと子との親子の關係は眞實にして相互の間に疑惑の雲なく、如来を我有とし、我如来の有たりとの事實は、眞實にして疑はんと欲すと雖も疑ふ余地なきに至るを信とす。

ミオヤと子との關係を通じて信仰と為すとは、如来の恩寵と合する処の心を云ふ。然れども人の心理を知力と感情と意志とに分類する時は、知力的の信仰を信とす。知力の信仰とはミオヤと子との關係を信じて疑はざるを謂ひ、信は澄淨又は忍許と云ふ義にて、全く宗教の眞理を是認して疑ひの濁りなきの義、また眞理たりと自ら是認して疑はぬことなり。

仏法の大海には信を以て能入とし、信仰なくては道に入りて眞理を我有とすることは出来ぬ。また信は道源功德の母として、道を求め道を得るは信心が本である。信から

道みちに入はいれば一切さいの功徳くどくも此これより生しやうじ来きたるとの義ぎである。

二 一 種 の 信

聖善導せいぜんだう二種しゆの信しんを明あかしなされた。一きに機きを信しんじ、二ほふに法ほふを信しんず。初め機きを信しんずとは機きは自己じこの分齊ぶんせいを自覚じかくすること。自己じこは如来にょらいの子こであると共に人間にんげんの子こである。是これは仏性ぶつじやうと煩惱ぼんのうとの両性りやうせいある所以ゆゑである。仏性ぶつじやうは具有ぐゆうすれども伏能ふくのうにて、鶏とりの卵たまご子の母鶏めんどりに由よつて孵化ふくわせらるる如ごとくに、ミオヤの恩寵おんちやうを仰あかがざれば開發かいはつできぬ。ミオヤの恩寵おんちやうを被かむる理法りほうを法ほふと名なづく。法ほふとは人ひとの深底しんていの靈性れいせいを開ひらく理法りほふにて、本願力ほんぐんりきまた如来にょらいの光明くわうみやうと名なづく。ミオヤから子こを靈育れいいくし給たまふ働はたらきに外ほかならぬ。

煩惱ぼんのうと云いふ即すなはち肉我にくがは是罪惡これざいあくである、是人間性これにんげんせいである。人ひとは形体けいたいの方ほうより云いはば、本動物もとどうぶつの共通性きやうつうせいを以もつて只肉体ただにくたいの生活せいかくわつのみを重おもんじ、単ただに動物どうぶつの本能ほんのうのみでなく意識いしき的に發達はつたつした文だけに狡狴かうかつなる動物どうぶつである。未いまだ靈性れいせい開ひらけぬ程ほどは罪惡我ざいあくがである。人ひとの動物どうぶつ

性が発達してミオヤより稟けたる靈性は永く閉籠められて肉我が爲に横領せられて居る。恰も幼君が横暴奸邪の臣に権利及家財を横領されて居る様なものである。靈性はミオヤの法に依らざれば顛動することが出来ぬ。

生命は魚なる劣等なるが先きに発達して高等なるが後に顛動し来るが如し。例せば国を建つるにも、初め劣等な種族が群居して、後ち蛮勇に猛き族が酋長と成りて野蠻なる国を為す。されど更に天孫種の君が前の蛮族を降伏して新たに文明国を建設する如く、個人に於ても然り。始めに肉の動物我が数多の煩惱眷属を率ひ、我儘勝手を働らき、自から偉がり顔をして天意の在る処を覺らず、毫も謙遜なく、又自から其の非なるを慚づるなく、己煩惱の奴隷たるを覺らず。

罪惡の根本は無明。肉の我は動物性なので唯だ活きんと欲する生氣を本として活きて居る。之を無明と云ふ。故に人生の真理を自覺することは出来ぬ。然れども個性の本性にミオヤの使命を以て此世に生れたる靈性あり。靈性はミオヤの使命を以て此身

を裏け一身の君たり。一切の動物性の煩惱を制伏して各々其の職分を尽すべき真理なるを覚知せざるを無明と云ふ。

もしミオヤの法なる光明に依りて人々自己の靈性開發し我れ全くミオヤの子たる真心明け来らば、一切の煩惱も悉く服従して還て忠臣として真理に仕ふるの働とならん。

(一) 罪惡の我と認む——信機

靈我未だ顯現せざる我は全く罪惡である。無明である、染汚苦毒である。一切の惡は悉く集合して我と成る、我は實に罪惡の張本であると、深く信認して始めて眞実なるミオヤに対する信仰起る。

然れども本と罪惡を我として居る故に自己の罪惡たることを認むることは難い。聖善導は、決定して深く信ず、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より己來常に没し

常に流転して出離の縁あることなしと。自身現に罪惡の凡夫と云ふ事が實に是認せらるれば、眞実に深くミオヤを信じらる。然れども自糞其の惡臭を覺えずと云ふ如く、中々自己の罪惡を自覺するは易くない。罪惡即ち自己の煩惱に種子と現行とある。そこが宗教と法律との罪惡の責任觀の異なる処である。煩惱の種子とはミオヤに背きて曠劫より我に随逐して生れ乍ら持つて居る煩惱の種子である。故に我は本來惡である。法律にては現行犯、言語、若しくは身体に法律上罪惡と認むべき行為を現はして始めて罪惡の責任と成る。縱令行為に現はれずも本々凡夫には種子として諸の煩惱具出して居る故生來罪惡と認む。故に生れたままの我なるものは根本的に罪惡であるから必ずミオヤの救済を仰がなくてはならぬ。此の罪惡我は無始已來我に附纏うて離れぬ種子を持つて居る。現行の上に許り認むべきではない。本來惡であるから罪惡を現はすに至るのである。例へば狼は人に噉み付いたから始めて猛獸と云ふべきでなく、本々人に噉み付くべき性質を有つて居る獸であれば、本來悪い奴であると云ふ如きな

り。

我は毒蛇。キリストは私共を指して蝮の裔と呼んだ。仏陀は煩惱の毒蛇眠りて汝が胸に在り黒蛇の其の室に眠るが如しと誠め給ふた。実に我等が胸には黒蛇が眠伏して居る。蝮の裔であるから、動ともすれば毒牙をむき出して人に喰み付くのである。我らが胸中に眠りたる蛇の類は只一つの蛇ではない、数多の毒虫が伏居して居る。実に危険物である。

唯識論に二十の煩惱が私共の胸の中に眠伏して居ると説いてある。今其中を暫く述べれば、

忿、恨、覆、惱、嫉、諂、害、橋、慳、誑、無慚、無愧、等の類である。煩惱と云ふ曲者は賊であるから日中は明を恐れて胸中に潜んで居る。闇くなると忽ちに現はれて害を為す。忿と云ふはムカツと憤ることである。人は顔から見た処其の様な恐しい奴が有りそうもないが中々そうでない。或禅僧が性来疔癩持であつて自分乍らも持余

したと見えて、或高徳の禪師を訪ねまして、自分の悪い持前を如何にしてか之を取り除く道が有る哉と問ふた。すると禪師は笑ひ乍ら御坊は持前と云ふが什麼な物なるかここに出して見よ、宜しく取り去つて遣うからと、云はれた。時に僧、胸中を探るも腹中を擦するも疳癩の居所が分らぬ。竟に我が全身に求むるに疳癩なる物なしと答へた。焉で禪にては本来無一物と云ふ方から仏性の方を働かすやうにするが、それでも其の僧が禪師の前では、若しや持前の曲者が影もない様に為つたが、若し外へ出て突然に啞呆坊主と云つて罵詈の縁に遇へば忽ちにその持前が現はれざるを得ぬと思ふ。是平生眠伏して縁に随つて働くのである。恨、と云ふは怨み、矢張或場合には発せざるを得ぬ。覆、とは己が非を陰覆すことにて、我々は白日青天胸中玻璃の如くに一点の覆ひ隠すべき汚点なしと口には云へど、マサカの時には隠すではないか。又た一朝事が生ずれば忽ちに懊惱して平生の勇氣も萎縮してしまふのが悩である。嫉、とは嫉妬の念、押へ難く為めに賢人を讒誣する族もあり。また呪咀の三本の灯を頭に戴き右

の手に鎖を持ち左の手に藁の人形を携へて、いかにも嫉まし相に画かれたる如きの心の相は、大廩高樓に栖める家庭にも影を止めぬであらう。諂。こびへつらひを云ひ、いかにも卑賤な輩にのみ宿る。貧乏神見たようなものかと思へば随分平生には横柄な顔をして居る傲慢な人にも選挙前にかかると忽ちに腰も卑くなれば頭も安く売るやうに成り巧言令色を以て人に接し人に諂諛する。つぎに害、いかに温良の君子風に見えども煩惱と云ふ奴が宿つてゐる限りは油断はできぬ。一朝事に触るれば精神のピストル抜かぬとは云へぬ。度にこそ異れ、復讐敵対の情は持つて居る。橋、橋慢にも種々ある。未だ得ざるを得たりと謂う増上慢もあり。また不遜驕傲にして無礼を顧みざる如き、また卑下慢とて身賤くとも我には亦自己特長の勝れたるものありと為る如きなり。最も動物性の甚しきは、無慚無愧である。人に慚ぢざるを無慚と云ふ。己に恥ぢざるを無愧と云ふ。人として慚愧心なきはない。然れども胸中に潜める奴は鉄面皮である。若し人、他人と争ふなどの折に、能く無慚煩惱は忽ちに面目を現はす。怨恨

などに随伴して発り、廉恥も何もない。言間敷をも云ひ己が人格をも忘却し、常識も何も有た物でない。随分世間には仮令へば夫婦間の如きにても我夫の瑕疵を他人の前に暴露し言語道断なる挙動を為す者もあり。斯の如く種々の煩惱が胸中に潜在すると、恰も賊が闇き処に隠伏して機会を得れば現はれて悪事を働く如く、全ての煩惱賊が潜伏して居る。凡夫の真意は諸の煩惱の集合する処、此の現在我は全く罪惡の集合せる主体なるを自覺せず、終身つひに煩惱の奴隸として闇より闇に、苦より苦に入りつつある。

諸の惑を以て我とし惑より衝動する処の一切の行為は誠に誠に惡を為す。諸の凡夫は惑によりて業を起す。煩惱より起る働きは自から惡非となる。業あれば必ず其の報あり、其の報は苦を受く。

若し己が罪惡を自覺し、凭の如く終に人生闇黒の中に沈淪するの甚だ非なるを覺りて始めて眞の求道心が生ずるのである。

人生再び得難し

六道四生の中に人身甚だ得難し。此の身今生に向つて度せずんば何れの生にか解脱せん。無始曠劫以来の生死も今生に遇はんが為めの準備と思へば実に此世最も重し。暫く宇宙の構成に就きて窺うも凭く天地万物広大なる設備に藉らざれば此の身を生活せしむる能はず。天地の広大なる万物の無尽なる、一切の設備は悉く我が生を完全にせんが為め我を永遠に度せんが為めの万物であると思ふ時は吾人は生涯全力を尽して道の為めに果たさざるを得ぬ。

又我此生の本源を、靈魂の方を暫く措きて生物としての己が生命の血脈の歴史を考ふるも、我人身の祖たる原始的人類に至る迄の代々に亘りて、非常な努力を以て生命を向上せしむるに就ての功勞甚だ重し。尚ほ人類より遡りて生物原始に至るの経歴に至つては彼等が天意の使命として全力を竭して競争し奮闘し努力して進化したる結

果、此生を受けたることは生物原始より人類に至り更に原始の人類より数千万代に渡りて有ゆる努力の結果として此身を得たり。彼等が無数の生命を賭して後世に貽せしことは偏に己が此身を以て功果を収めんが為めの責任を担ふことを覚知せば実にまた此生の任務甚だ重し。

自己の機を覚知するの意識は宗教の要を認むべき為めである。罪惡我を主人として生涯只肉の爲めに奴隸と爲りぬれば闇より闇に入る、人生の恨事何事か之に如ん。宗教より見れば、肉我の生は天孫種たる靈の君臨の予備としての使命として始めて天意に随順し、若し天種の靈性にして君臨し給はば其臣民として忠実に奉仕せば肉の生命また天意に對する忠臣として貴ぶべき価値あり。自己の天然の我は自己の奥底に伏在せる靈我の顕現を待つて、靈性の臣下としては実に無くてはならぬ国家の干城としまた股肱として貴ぶなり。靈性の開頭は人生の一大事なり。此の靈性は聖子なれば必ずミオヤの恩寵に依らねばならぬ。是れ法を信ずる所以である。

(二)法を信ず

法とはミオヤが子らを救護するの契機を云ふ。ミオヤが子を養ひて、ミオヤの全きが如くに靈化するの靈力なのである。

前に吾人はミオヤの子たると共に人間の子である故に、一方には動物性に働らき、本より必要な心の働きも進化するに随つて脱却せねばならぬ性能がある。ミオヤの子たる靈性は動物我の奥底に伏在して容易に顕現せぬ。鉢中の純金の喩の如くに存在す。人類に進んだ我らも動物性に全生活を支配せられる。然れども伏能なる靈性は果実中に伏せる種子の如く機会を待つて芽発せんとする靈の性徳である。

ミオヤより子らに対する法は、即ち、至心に我をミオヤと信ぜよ、我を愛せよ、我聖意に叶ふやうに望めよと。

ミオヤは子らを愛する大慈心から四十八の本願を建てられた。一々の誓願は悉く

一切の子らをして、ミオヤの完全の如くに完からしむる法である。ミオヤの全部を阿弥陀の名に表徴して子らに与ふアミダの靈号にミオヤの万徳を悉く備へたる名なる靈名を以て、ミオヤを号ふ時、子らは己が全部を献げてミオヤに帰命信賴す。

子を愛するミオヤの聖寵とミオヤの愛育する子らの信仰と契合し最親密なる契合するを得。

ミオヤの全心と子の全心と合一し契合し得らるるが信心である。ミオヤと契合し得らるる性は本来、父子的の性能を以て居る故である。ミオヤと契合し得らるる性能は有つても若しミオヤの召喚の声なる法に値はざれば子が自分から目覚むることは出来ぬ。

ミオヤを信ずるに二種の義あり。機の全般を投帰没入して我なしと云ふのと、ミオヤに帰してミオヤの中の我との二あり。甲は超絶他力主義、乙は具存主義なり。

超絶と具存。ミオヤに帰命信賴するに超絶主義とは、眞実仏性は只如来にのみ存す

凡夫には仏性あることを許さず。凡夫は純然罪惡にて如来に投歸投入して毫も我に遺すべきなきに至るを旨とす。如来に投入したる上には本より何れに成し給ふもアナタに一任して毫も私の関する処に非ず、故に自己のは善として取るべきなく惡として恐るべきなし。善惡共に虚妄なり、只眞実は如来のみなりと。

乙は、衆生は本一大法身の大靈より受けたる靈性伏能す。然れども靈性の極く靈妙なるを顯はす爲めに、初めに動物性の劣態の中に靈性を伏態とし、劣等なる形氣の方を準備的に發達させて、而してミオヤは一大法身の靈力妙用より報身如来なる萬徳具備のミオヤの大愛を現はす爲め慈悲の現はれとして相好円満の靈態を現はして子らを授受し給ふ。

子らはミオヤの慈悲現たる相好円満と大慈悲の母の養に養はれて御子の靈性が現はれ子としての靈性が漸々に現はるゝ様になる。此の身はミオヤの中に己を投入して了ふのでなく己を通じてミオヤを認信す。我ミオヤの中にあり、ミオヤ子の中にありと

の信である。

信心のすがた

信は澄浄とて心の澄湛たるすがた。衆生信水澄む時は仏日の影中に映ず。ミオヤの大日輪は永しへに靈界の中天に在して普く十方法界を照し給ふ。衆生の信心の水なき時は其の影映ぜず。縦令高山の頂にても水なき処には影を止めず、また縦令底深き処にても水ある処に日影は映現す。よしや人間にして高貴豪族また博学多識の性にても信心の水なき時にはミオヤの靈応は映ずることなし。人いかに智識理性能く発達し世界の事物に精通するも靈性の信水なき時は大靈現のミオヤを映ずることはできぬ。

たとひ身はいかに卑賤にて無智鈍根たりとも眞実に信心成ずる時はミオヤの靈応常に其心中に入て現はるゝのである。また喩へば、一月天に在て影萬水に映ず。湛潭たる大海水にも亦溪谷の泉にも江にも川にも乃至手跡の溜水にも草葉の露にても凡そ水

ある処ところに月光げつくわう映現えいげんせざることなきが如ごとく、往昔わうせきたし大聖だいしやう釈尊しやくそんの聖意せいいに現げんずるミオヤの靈れい光くわう、また文殊もんじゆ普賢ふげん觀音くわんおん勢至せいしの聖意せいいに映えいずるミオヤの光ひかりも、善導ぜんだう源空げんくわう其他そのた大聖だいしやう賢衆けんしゆの心こころに輝かがやく光ひかりも、乃至ないし一文もんふち不知くどんの愚鈍あまにふどうの尼入道とちがらしんぐわちゆうの信心しんぐわちゆう中に感かんずる処の靈れい応おうも決けつしてかはることなし。如何いかにとなれば信心しんぐわち已すでに成じやうずる時ときはミオヤ常つねに我われに在あり。我われ常つねにミオヤに在あり。斯かくの如ごとくして始はじめて信仰しんかうの生活せいくわつと云いふべけれ。

豈あ悦よろこばしからずや、文殊もんじゆ普賢ふげん觀音くわんおん勢至せいしの如ごときの大菩薩、善導法然ほうねんの如ごとき聖者の心中しんちゆうの生いける本尊ほんぞんが即すなはち吾人ごじんの常住じやうじゆうの本尊ほんぞんである。恰あたも往昔わうせき教祖きやうそ釈尊しやくそんにふね、天てんに輝かがやける月つきが今宵こよい我草庵わがさうあんの軒端のきばを照てらす。月つきと空そらと侘わかならんや。况いはんや本ほん来らい常住じやうじゆうの月つきは永とこしへに照てらし亘わたりて信仰しんかう心水しんすいに入いる。

活ける本尊

信仰しんかう生活せいくわつに先まづ第一だいいちに安置あんちして離はなるべからざるものは自己じこ精神せいしんに常住じやうじゆうに安置あんちすべき活い

ける本尊である。未だ活ける本尊安置せざるもの、正に信仰得たりと云ふことを得べけんや。教祖釈尊時に涅槃に入らんとするに遺訓してのたまはく、我滅後諸の弟子展転して之を行ぜば、如来法身常住して滅せざるなりと。永遠に靈存の如来は一切処に遍在して衆生心水の中に在まし給ふ。また靈活の本尊備はらざれば、眞の信仰と云ふに足らずとせば、然らばいかにして活ける如来を我らが本尊として安置することを得ん。

答へて、靈活の本尊を安置せんと欲せば、須らく先づ従来の主我罪惡我の巢窟を尽除して宇宙唯一の大靈の粹なるミオヤの靈応を勧請すべきである。是佗に求むるに及ばず。従来我の非なることを信じ、至心にミオヤを信じて念々常にミオヤの靈の現はれんことを祈念せば、必ずミオヤの靈は常に我靈性に在まさん。

仏教の精舎また禮拜堂に本尊を安置するの意義は、何んの為ぞ。是信徒の精神に活ける本尊を安置すること凭の如くにせよと標榜するに在り。木石にて構造せる堂宇に

は、金石木像また画像等を以て本尊を表はす。活ける精神には靈活の本尊を常に安立すべきなり。

若し靈活の本尊が自己の主と為る時は一切の煩惱肉我の心意も悉く従僕と為りて、昨日の賊今日の忠臣良民と為る。

觀世音の宝冠に常にミダの立像を戴けるは、蓋し觀世音は常住にミダを靈活の本尊として捨離せざることを表はしたり。若し靈活のミオヤ常に自己の頂上に存在する時は、神聖、正義、恩寵の靈性が自己の心中に輝き、自から精神生活に大なる靈感を與へ、常に自覚し常に指導し常に光明への大道に向つて進行せしむ。聖者觀音の聖影を眺むる時は即ち念ずべし。觀世音は我らが兄たり。常にミオヤを信念して捨て給はず。我らは弟たり妹たり亦た兄の如くに常にミオヤを念じて、ミオヤと共に在らんこと、一に觀世音の如くならん。觀世音はミダの長子、法王子としてすべての同胞等を指導してミオヤの聖意に誘引せんが為に出で給へり。

西蔵の仏典に曰く、禪定仏の阿弥陀尊、大悲三昧に入りて、人仏釈迦を出して娑婆の迷子を教へ、此のミダに帰入せしめ、釈迦仏滅後、弥勒の出世に至る迄は、法王子観音を使はして、佛法を護持し衆生を引導すと。

寔に是れ、観世音はミオヤの長子として、全ての同胞をしてミオヤの聖意に帰命信賴すべく導き給ふ。我等は常に観世音がミオヤを戴き給ふが如くに、常にミオヤを戴きて、聖意に仕へ奉らん。是れ信仰生活に活ける本尊を安置すべき所以である。

信 の 三 階

ミオヤの子との知力的の關係を信と云ふ。知力と云ふも信の真意義は宗教の意義を理解せるのみでは活ける信とは云はぬ。正しく信のある生命はミオヤを我有とし、我ミオヤの有となるの真理を承認し、活ける信仰に入りて、初めて信の価値あり。信に三位を立つ。

一、仰信。天然素朴の信心

二、解信。理性的に真理を理解す

三、証信。実験証明

(一) 仰 信

仰信とは天然素朴の人にも本来仏性あり、未だ顕動させざるも、伏能として存す。ミオヤの真理を聞いて一心一向に仰いで信じ、信賴する時は必ず救済に預ると平に思ひ込んで毫も疑ひを挟まざるが如きは仰信と云ふ。実を尅して論ずれば、宗教的生命は決して遠きに求むべきに非ず。驀直に信じて一向に念ずる時は信に入ること速やかである。信仰を理窟の力にて真質を獲得せんと欲する如きは、還つてミオヤと遠ざかる如し。

信仰獲得の方法に就ては後に演べん。今は信の伏能心を明すのみ。

往昔印度に一の老農夫あり。老いて死の近きを思ひ自己の死後を案じ、曾て聞く羅漢果を得ざれば、生死免れ難しと、我今云何がして羅漢を得んと。忽ちに発心して優婆塞多尊者の徳名を聞き遙かに尊者の室に訪ねて志願を伸ぶ。願くば尊者よ、我が為に羅漢果を許せと。若し學識を有する漢ならば、羅漢果を得ることは、七賢七聖十四階級を経て初めて得、とても我が望みの叶ふ処に在らずと思ふならんも、農夫は幸ひにして無學文盲、羅漢位を得るの階級云何については、一向に知らず。盲勇何の恐るゝ無く、直に羅漢果を許せと請ふた。尊者は彼が仰信の深遠なる必ず得度すべきを洞察し、羅漢を得んと欲せば我に随つて来れと峨々たる山嶽に昇り崖畔の老樹枝がつかのびたるあり、汝枝上に昇れよ、汝をして得度せしめんと。老夫は一心一向羅漢道を得んと欲して、崖下数千丈の危嶮を毫も意に介せず忽ちに枝上に攀上る。尊者命じて其枝に右の手を放たしめ次に左手、次第に左右の脚を枝より放たしむ。時に老夫口を以て枝を啖ふ。漸くに尊者問ふて汝が求むる処什麼と云ふに、老夫若し口を開かば枝

より落ちて失命せんと云ふ如きの躊躇なく、我は羅漢果を得欲しと。老夫の仰信直に羅漢果を得て空に昇り、七多羅樹十八變を現じて得度の相を示し、即ち下りて尊者の爲に謝礼せりと。

凭の話は信仰なき輩には兇戯の如くに感ぜられんも、然れども若し是れ至純単直に仰信の心相が如上の談にて、至誠天真、人間を超絶して法爾として感応す。老夫が羅漢道を獲たる信を疑ひ若し此談を聞いて一笑に附する如きの族ならば仰信を得得難し。

(二) 解 信

宗教上の真理を能く理解して信認すること、現代の如く百般悉く理を究め、性を明して事業を爲す。又凡そ天下の事、一として理法の然らざるものなし。故に医業としても、生理、病理、治療法、薬学の如きを学び、其の理に明かならざれば治療を

施すに由なし。また農業の如きも植物生理、また肥料の理化学的智識なくては文明的の農業は出来ぬ。宗教にも亦然り。神人の関係の如きを研究す。神学又宗義学あり何れも宗教の眞の智識を得る処の学である。

解信とは理論的に宗義上の其の意義を領解して、自己の理性能く之れ承認して信ずるにある。

法華經の信解品に、迦葉等の四大弟子等が仏陀と自分達との父子的の関係を能く領解して疑なきに至り、譬を以て仏陀世尊に告白せり。如來は本一切衆生の父にて衆生は子である。譬ば、此に長者あり、其財富無量にして世に双ぶべきものなし。長者に子あり。幼にしてあどけなく、父の膝下を迷ひ出で、憐むべき乞丐と為り、貧里に彷徨せり。父は我子の乞食の中に在るを發見し、初めに不淨の掃除を為さしめ、父と漸く近づくに及んで父子相親しみが初めに風采殊に嚴なる家從を使はして、子を迎へたりしも、還つて子は父のことを解せず、偽りて己を殺すに非ず哉と疑つて遠く逃げ

隠る。次に家従をして乞食に扮して相親しみ長者の邸に招き寄せて初めに不浄の掃除せしめ、父と漸く近づくに及んで父は子のために其の実を明かし、父は子のために所有の財宝及び一切を譲与せる如く、如来は一切衆生の父である。然るに衆生は無明愚にして、如来慈悲の許を背き六道生死の街に迷ひて貧苦を受く。如来娑婆の衆生のために、丈六弊垢の身を現じて衆生と共に在り。弟子等のために初めの煩惱の不浄を除くことを誓ひ衆生の機根に応じ随つて、衆生は悉く如来の子なれば一として、成仏せざるは無しとの大乘の真理を明かし給ふこと、一切の声聞も悉く如来の子なれば、必ず我等成仏すること疑ひ無しと深く信じて領解し信を立つたる所以を告白したるのが即ち法華經の信解品である。

今は正しく弥陀本願の真理を解して信ずる也。

ミダの慈悲は、無始より流転して自己の力にては出離すること能はざる迷子のために、四十八願を建て、正に摂取し給ふ。ミオヤが子のために建てし本願、何とて疑ひ

あらんやと能く領解して信ず。

聖法然の我と人と共に如何にして容易に得度の道を得んと、一代の聖經を幾度びか繰り返へし、唐土伝来の聖籍として披かざる無く、年四十三歳の時、聖善導の觀經の疏に、行に就いて信を立つるの文即ち、一心に専ら弥陀の名号を念じ行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざる者は是れを正定の業と名付く、彼の仏願に順ずるが故に。との釈文に依りて初めて弥陀の願意に通じ善導の意口称の念仏は弥陀の本願に順ずる故と云ふ、故と云ふ文に深く真意の有ることを明らかに了解して、弥陀本願の念仏を以て往生の行と深く信じて一切の業行を抛ちて、専ら念仏の一行に修し是に一行專修の念仏宗を開き給ふに至れり。是れ聖法然の解信なり。

聖聖光。聖法然に師事して浄土の法義を学ぶこと年久し。師の三心四修五正行等の浄土の宗義を領解して深く信を立て、鎮西に帰りて法然上人の立義を拡張せり。亦良忠上人は聖光上人に稟受して、浄土一教の安心起行の流義を領解し、授手印

の領解文を認めて自己の解信を告白せり。此の如く宗を立て流義を汲むに就いては夫々、心理と起行等の要義を領解して信を立つ。然らざれば宗義を伝ふるなし。是れ伝承的の信仰として必要欠くべからざるものである。

信仰に流義や伝承的の信仰や歴史的相伝的の信仰には流義の解信を重ずる。真宗の如きは当流の安心はと云はゞ、是れ流義を相承する解信である。

解 信 と 仰 信

解信。門外より始めて宗教の入門としては宗教の意義を理解せざれば宗教に入ること能はざるを以て、人々は宗教理論的の解信を要す。已に入門して流義の安心起行を会得せんには、また其の流義解信を要す。真実宗教の生命には、解信と仰信との二つありて、必しも理論的の領解を要せざるも可なり。

人には本来伏能即ち生れ乍ら靈性具せる故に必ずしも、理論を待たずして、仰信的

に眞実の宗教の生命は得らるゝものなり。卒直仰信が還つて生命ある信仰を成ずるなり。されば聖法然の我は烏帽子もきざる法然房也。黒白をも童子の如く是非も知らぬ無智の者なり。只念仏往生を仰いで信ず。釈迦は念仏して往生せよと勧め、弥陀は念仏せよ来迎せんと仰せられたり。此一事を信じて余事を知らずと。

又、法爾の道理と云ふことあり。炎は空に昇り、水は降りざまに流る。菓子の中に酸きあり、甘きあり。是等は皆法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は名号を以て、罪惡の衆生を導かんと誓れたれば、唯一向に念仏だに申せば仏の来迎は法爾の道理にて疑ひなし。

又念仏中には全く別の様なし只申せば極楽へ生ると知つて心を至して申せば参るなり。又煩惱の薄く厚きをも顧みず、罪障の軽き重きをも沙汰せず、唯口に南無阿弥陀仏と唄へて声につきて決定往生の思ひを為すべしと聖法然の示し給ふ処仰信なり。

仰信と解信に就いて喩を以て演ぶれば、信仰は心靈を養ふ糧であるが、此の肉体を

養ふ食物に例して見れば、此の食物が什饜の理化学作用から吾人の血肉と為りて身命を支へ行くのであるか学説として詳細に解せんとすれば容易でない。先づ食物の蛋白質、脂肪、澱粉、纖維などは植物や動物の肉とか皮とかから取つたので之を摂取して之を噉ひて胃腸にて消化して身体中の一切の細胞に悉く配当して血や肉として生命を續けて居ると先づ此理化学上の研究となると先づ解剖学も、生理学も、心理学も、充分に学ばざればならぬ。また植物学、動物学、理化学、機械学等の一切の科学の智識がなくてはならぬ。

然らば凭くの如くに智識を以て食物消化の理が了解せざれば、食物を消化して營養と成らぬものならば世界に全く是等の食物を消化して血肉と為りて生活し得らるゝ者幾人かある。然るに事實は然らず。自分の營養機能の智識もなく、食物の物理や化学の学説は一向に智識なき労働夫にも充分に食ひ立派に消化して血肉を作りて働きてあり。心靈を養ふ理に於ても同一である。宗教上の理論は食物の学説のやうな物で

ある。假令たとへし宗教ゆうけう大学だいがくを卒業そつげふして説明せつめいとしては立派りつぱにまた理論りろんとしてはいかにも精通せいとうしたにもせよ。若しも全くまった心靈しんれいを養ふやしな靈的養分れいてきやうぶんを正しく享受きやうじゆするにあらざれば、心靈しんれいの生命せいめいとはならぬ。真しんの信仰しんかう生活せいかくわつは出来ぬ。

解信げしんは靈的れいてき食物じよくわつと消化じやくわの理りを知るしに過ぎぬ。若しも全くまった自みづから食しょくするに非あらば靈れいに活いきることは出来ぬ。労働らうどう夫かが立派りつぱに肉體にくたいを養やしなひ力強ちからつよきが如ごとく、宗教しゆうけうの学說がくせつ智識しきに乏とほき愚夫愚婦ぐふぐふにても、一心しん一向かうの單直たんぢき信仰しんかうを以もつて直轄まっしからに進すすみたる信仰しんかうが還かへつて靈れいの實質じつしつに豊富ほうふにして立派りつぱに光明くわうみやうの生活せいかくわつに入るいるのである。是これ信仰しんかうの出来た輩ひとである。聖法せいほう然ぜんが法爾ほふにの道理だうりありて一向かうに念仏ねんぶつ申まうせば助たすかるとは、理り化学くわがく等の智識ちしきなくとも、滋養じやうぶつ物を食しょくすれば扶持ふちぢすると同一どうである。解信げしんは理論りろん学說がくせつとして解かいし得うるので信仰しんかうは理解りかいに依よらずして直たゞちに信仰しんかうして、靈れいの營養えいやう分ぶんたる念仏ねんぶつを實修じつしゆするにあり。

仰信催眠感応の例

全体現代は人文大いに進みて、百事学理に基き科学の証明なくば、一切信を措くに足らずと云う科学万能主義とまで為つた位で在る故に、己の理性または経験の範圍を越ゆれば宗教のこと迄も承認できぬ様に為つた。然るに靈性上の事は理性を以て判ずることは出来ぬ。人間の精神を二つに分けて天性的と意識的として天性をアラヤ識とすれば意識は第六識である。天性は小児が大人と成つても同一である。意識は幼稚な状態から段々と発達して初め人間上のことが解からなかつたのが経験を経るに随つて益々事理に明るくなる。意識は自己の理性の範圍外の事は承知せぬ信じないそこで患者やまたは性癖を矯正するに催眠術を施す事がある。若し人が全く天性にして、人間的の理性的意識がなかりせば、術者の暗示を直ちに受くれば催眠の必要はない。然れども多くの人は然らず。中々に人間的の意識が発達してゐる故に暗示を直に受難い。依つて止むを得ず、狐疑の主人たる意識をして眠らす外はない。天真なる天性は眠るものでない故、其の物に暗示を与へると彼は真に受るから能く感応して其の性癖

をも矯正することが出来る。人間としての意識は必要なれども、超人間界上の事には寧ろ碍をする。世間の意識は昧然たる人にして一向の信仰にて種々の感應を現はすなり。

高等なる心霊上の信仰に於ては、理性の範圍を超越したる事なれば、如何に高等なる賢哲たりとも、大なるミオヤの法令の下には仰信するの外なし。故に聖法然は、たとひ一代の法を能くく学すとも一文不知の愚鈍の身に為して尼入道の無智の輩に同うして智者の振舞をせずして、只一向に念仏すべし、と。是仰信なり。

証 信

宗教上の真理、即ち如来の實在を實驗実証の上に立つる信仰である。基督教にて、聖靈に感じまた啓示を被むりし如き、神の實在を証す。仏教にて仏知見開示も、亦悟道見性等或は念仏三昧發得し、光明を見、仏の相好を觀見するときの如きを云ふ。

聖法然三昧発得記に、別時念仏、初日光明少し現じ、第二日、水想観自然成就し又瑠璃地相少し現じ、第六日後夜に瑠璃地及び宮殿等の相現ず。二月四日早晨に復瑠璃地現ず、或は赤青色、宝樹あり、或は四五丈或は二三十丈、其相宛も経中の所説の如し、或は極楽衆鳥並に笈笛等の音を聞き、其の後、日々種々の音声を聞く、或は阿弥陀仏及観音、勢至等現ず。上人入寂に近づき、弟子等、三尺の弥陀の像をむかへ奉りて病床のみぎに立て奉つて、此の仏瞻めましますやと申すに、上人指にて空を指して、此の仏の外に又仏まします瞻むや否や、と仰せられて、即ち語りて曰く、「凡そ此の十余年已来念仏功積りて、極楽の莊嚴、及び仏菩薩の真身を拝み奉ること常のことなり。然れども、年頃は秘して言はず、今最後に望めり、故に示すなり」と。

唐の聖善導盛んに教化を施し給ふ頃、懷感禪師と云ふ学識高き僧あり。是れ法相の学者なり。聖善導の念仏往生の教化を聞きて、大に疑惑して導師に問ふに、為に念仏

三昧さいまいの法ほふを教おしふ。禪師ぜんじ一心しんに三昧さいまいの法ほふを修しゆして三年ねんの後のちに三昧成就さいまいじやうじゆして、白毫びやくかうの光ひかりを感じかんじ、後のちの釈疑しゃくぎの為ために群疑論ぐんぎろんを著あはす。当時たうじ導師だうしの化度げどにより、老若男女らうにやくなんによを問とはず、仏ほとけ及び浄土莊嚴じやうどじやうごんを見み、光明くわうみやうを拝おがむ者もの数を知しらずと。証信しやうしん必かならずしも難かたしとせず、至誠しせいに一もつら念ねん仏ぶつして止やまざる時ときは必かならず成就じやうじゆす。

また縦令たどへ、仏ほとけの相好光明さうがうくわうみやう及び莊嚴じやうごんの相さうを觀見くわんけんせざるも、深ふかく信しんじて大慈悲心だいじひしんを感かんじ、また仏心ぶつしんと相応さうおうして法悦ほふえつを感かんずる如ごときに至いたれば実驗じつけんの信仰しんかうである。必かならずしも好相こうさう觀見くわんけんを要えうせず。人ひとの精神せいしんの奥底おくそこに伏かせる靈性れいせい開發かいはつして、精神せいしん一てん転てんし靈れいに復活ふくくわつする時ときは自おのずから靈感れいかんを得えて証信しやうしんに入いる。

無生忍むじやうにんを得え、また種々いろくの三昧さいまいを發はつす如ごとき、何いづれにしても信仰しんかうの実感じつかんを得えたるは是これ証信しやうしんの分ぶんと云いふべし。

仰信かうしんより証信しやうしんに至いたる、何いづれにしても、信しんじて疑うたがひなきに至いたれば正まさに信しんを得えたるものと云いふべし。

愛

宗教的 感情の愛ほど不思議なる物はなし。いかにとなれば、世に如来ほど尊ときものはなしと、絶対的に崇とき高き／＼限りなき迄に尊とく恭敬しながら、親しき近き自分を放すこと能はざる迄に親近せし実感なればなり。実に如来は神聖にして侵すべからざる一切に超え給へる独尊として衷心に信じ乍ら、恐れもなく憚りもなく寢間に寝乍ら心の懷中に抱き、親子の間に於て明し兼ねたる胸の奥まで打明て語る。さらば輕蔑するかと云へば決して然らず、寧ろ眞実に尊敬するなり。それを何故然るやと問へども答ふる能はず。それに親密の親子の情ありて、割ることも離るゝことも不可能なる仲とや云はむ。されど世の中には斯の如き不可思議なる感情の能力を、一向に經驗せざる人も多からんと思ふ。

愛は我と他とを同一視して、彼が憂苦を己が憂苦とし、他の喜樂を我が喜樂として

感じ、自我を以て異身同体の如くに利害苦楽を共鳴するものは愛なり。故に愛は情を以て、我と彼との間を親密に繋ぐ所の情緒なり。普通此情の最も強きものは親と子との間に於て見ることを得。又相憶ひ合ふ異性の間にも現はるゝなり。生理の自然として愛の最も深きものは母と子との間なり。両者は温かなる血を以てより合ひ、愛といふ情の糸を以て繋ぎ合ふ。また世には両者の間を親密にして、水も洩らさぬ計りに細かに繋ぎて温血の通ひつゝあるは、相愛し合ふ異性同士の間に行はるゝ愛なり。然れどもこの異性の間に繋ぎ合ふ愛は、生理的肉より発する或る幻の如き恐しき力なり。尚之等より一層微妙にして深遠なる、最も靈妙に最も高尚にして而も神秘的に、彼と我との間を親密に最も強く最も堅く結び合ふて離るゝことなきものは、如来と我との間を繋ぐ宗教的の感情の中心靈の愛なりとす。

神人合一とか、生仏一致とか、又は大我小我の冥合等は、大なる愛と小なる愛との繋合の力なり。実に本心に彼を愛して其絶頂に達する時は、自己の心全体は偏に彼を

憶ふ念のみと成り、愛者を念ふ心の余裕は毫も見出す能はざるに至る。それ仏を余念なく念ふ所より我が心全体が仏と成る。然る時に仏の方よりも亦此方を愛念し給ふ心より外なからむと思ふ。

「仏法の大海には信を以て能入と為す」と經に示されて、信は全く如来の實在を信じアナタは我等が慈悲の父と信ずるより、一心のすべてを献げて帰命信賴することを得。信より進み入りて感情の真髓に、アナタは我が有、我はアナタの有と親みの深き愛と為りて、我はすべてに超て、アナタを愛すと叫ぶ時に、親と子との間に靈き血を通はすなり。故にアナタは我が父なりと信ずるも未だ以て活きたる信仰とは言ふべからず。如来を全く我有として感情的に愛慕憶念して、常に心の妻に繋け、捨てんと欲するも捨ること能はず、宗祖の「我は唯仏にいつかあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」唯は余念なく遇ひたさに恋焦れをることにて、アナタを信ずる心はいかにも清けれど温情うすく、アナタを愛すと云に及んで何とも言に云はれぬ親しみとなるなり。噓へ

ば愛に二人の子を有てる母ありとせよ、二人の子等が共に彼は我母なりと云ことを信じて疑はざれども、一人は深く母を愛して片時も忘れず、一人は少しも親しみおもひの情なし。母は此二人の子の中に何れを頼母しくおもふ哉と云はゞ、母を愛する方未頼母しく思ふは勿論ならん。是二人共に信ずる事は同じけれども、一人は愛あり一人は愛うすし。我等が如来に對するも亦然らん。仮令眞実に深く信ずとも、深く愛する情なければ衷心より其美を稱する能はず。眞実に如来を愛する時、我全体が自づと如来に同化せらるゝなり。如来は大慈悲の中に衆生を摂めて離さざるなり。故に我等も如来を愛するを以て本とし、厚く信仰すべし。

宗教的の靈き愛を發達さするにも順序あり。また甚變な風に愛てふものを發するか。人の親子の情に於けるも胎内より生れ出でし時には左迄に濃やかなる愛情はなけれども、哺育掬養する程に何日と云ことなく可愛さが濃かになるなり。小児の方よりは無論生れて初めは眼も視えず耳も聴きわけなければ母を愛慕する情も未だ出でず。

哺乳ほにゅうされて發育はついくするに随したがひ母ははの顔かほを見分みわけるやうに為なれば、母ははを頼たのみ子を愛あいするに至いたる。如來にょらいと衆生しゆじやうとの間あひだに於おけるも亦また然しかり、未いまだ靈性れいせいの眼めも見みえず耳みみも聞きえずミオヤを慕したはしいとも思おもはざるなり。されど小兒こどもが泣なく声こゑに母ははの乳房ちぶさが含みまされる如ごとく、衆生しゆじやう口くちに名みなを稱しょうして念ねんずる処ところに如來にょらいの慈愛じあいの法乳ちよは感受かんじゆするを得うべし。良久やうひましき後のちには靈性れいせいが長養やしなせられて、母子ぼしてき的てきの愛あいの如ごとくに、慈愛じあいの親おやを慕したふ心を發はつすに至いたる。朝夕てうせきの禮讚らいぜんや平生へいぜいの稱名しやうみやう、または知識ちしきよりの養やしなひは皆靈みなれいを養やしなふ資糧しりやうたるなり。我等われらは赤子あかこなり。大なる慈愛じあいの懷ふところに常つねに抱いだれつつあるにも拘かはらず、未いままだ母ははの懷なつかしい顔かほを見ることが能あたはず。依よつて「我われは只ただ仏ほとけにいつかあふひ草くさ」と常つねに如來にょらいを奠傾まきけいして心こゝろの妻つまにかけて忘れわすれざるなり。

「只ただいつかあふひ草くさ」の愛慕あいぼの情じやうが自己じこの中心ちゆうしんより出いで、如來にょらいより靈れいの増長ぞうちやうを欣ねがふ原動力げんどうりよくなり。如來にょらいは真しんなり美びなり。其最高者そのさいかうしやに触みれんと欲ほつする我等われらは、益々ますくたか高たかきに憬おこがれ、弥々いよくび美みに恋こひして止やまざるなり。

宗教心の奥底に輝ける不思議の光は靈なり。其血は愛なり。それが靈の生命なり。それは大なる如来と衆生の靈とに依りて互に血を通はせり。さはあれ彼は初の程は雲に隠れし月の如くに、中々に其麗はしき容を現はさざるなり。彼に遇ふことは実に容易ならず。逢坂の関は最も難関なり。是の如くして、弥恋しさを増す。こゝに於て大師の如くに心を傾けて、寝ても覚ても忘れられずして、葵傾して止まざるなり。夫を心なき世間の人はいかに思ふらん。上天に音もなく臭もなく貌も姿も見えざる者を、甚變してかく恋するかと、狂気の如くに思ふ人もあらん。然れども宗祖より之を見れば却て其反対ならん。世の中に此れほど大なる、是ほど諦かなる者はあらず。加之世に此れほど靈なる美なるものはあらず。然に何故世の人は之を愛し之に触れ之を我有にせんとして慕ふ心を発さざる。

彼は実に美なり愛なり。我等が靈性は之を愛慕して益高遠に導かる。彼は最も遠きに在て而も最も邇くして、常に我等を向上せしむ。彼を葵心し愛慕するは奥底の靈

性せいより衝動しょうどうする力ちからなり。靈性れいせいが如來にょらいを愛あいするは同性相吸引どうせいあひきういんする自然しぜんの勢力ちからなり。他人たにんより「彼かれを忘わするゝ勿なれ」と命めいぜられて初はじめて動うごく力ちからに非あらず。自分忘じぶんわすれんと欲ほつするも能あたはざる靈的れいてきの衝動しょうどうなり。夫それが如來にょらいを葵傾きけいして慕したはしさ恋こひしさの禁きんじ難がたき情じやうなり。

如來にょらいと衆生しゆじやうとは元來親くわんらいおやこ子こなりしが、一おやたび親おやの許もとを迷まよひ出いでたる我等われらは、再ふたゝび親おやこ子の對面たいめんに依よりて、愛情厚あいじやうあつき親おやの慈悲じひをうけ、真まことの仏子ぶつしと為なる因縁いんねんを、楞嚴經りやうこんぎやうの勢至せいし円通章えんづうしやうを引ひて述のべん。

宗祖しゅうその本地ほんちと仰あふぐ勢至せいし菩薩ぼさつが楞嚴經りやうこんぎやうの説會せつあひに於おいて、數多あまたの仏弟子みでし及および菩薩衆ぼさつたちと共に、世尊せそんの命めいを蒙かふむりて過去くわこに初はじめて無生忍むじやうにんを得えし因縁いんねんを告白こくはくさる。

「爾時ときに大勢至だいせいし法王子ほふわうじが其同倫そのともがらの五十二ごじふにの菩薩ぼさつと共に、即すなはち座ざより起たちて世尊せそんの足あしを頂礼ちやうらいして仏ほとけに白まをして言もうさく、我昔恒沙劫われむかしじやうじやこうの事ことを憶おもふに、仏ほとけが世よに出いでまして無量光むりやうくわうと名なづく。相繼あひついで十二じふにの如來にょらいが出現しゆつげんましく、最後さいごの仏ほとけを超てう日月光にちげつくわうと名なづけ、彼かのはとけわれに念仏三昧ねんぶつさんまいの法ほふを教をしへ給たまひき。其法そのほふとは譬たとへば愛こゝに二人ふたりの者ものありて、一人ひとりは専もつら常に

憶念おくねんして忘れず、一人は専らもっぱら忘れて毫も憶おもはざるなり。是この二人が、若しは逢あはず、
 若しは見み、若しは見みずとあり。若し二人が相憶あひおもひ合あひて両方共りやうほうともに憶念おくねんが深ふかければ、生しやう
 より生しやうに至いたり、形かたちと影かげとの相乖あひくわい異いせざる如ごとくに相似あひにたり。実じつに如来にょらいは衆生しゆじやうを憶念おくねんする
 こと慈母じぼの一子しを憶おもふよりも甚はなはだし、然しかるに母ははがいかに子こを憶おもふとも子この方ほうより遁避とんひ
 すれば云何いかなんとも致いたし方かたなし。若し子この方ほうより母ははが子こを憶おもふ如ごとくに、母ははと子ことが相憶あひおもひ
 合あふて、縦令たとひ多生たじやうを經へても相違あひたがはず。衆生しゆじやうが仏ほとけを憶念おくねんして忘れざれば、現前げんぜんにも当来たうらい
 にも必定ひつじやうして仏ほとけを見みん。されば仏ほとけを去さること遠とほからず、余よの方便ほうべんを仮からずとも自おのづから
 心開こころひらきて仏ほとけを見みるべし。恰あたも香かうに染そまる身みは香かう氣きあるが如ごとし。此これを香かう光くわう莊嚴じやうげんと名なづ
 く。頌じゆに曰いはく「我われ本もと因地ちんに念ねん仏ぶつ心を以もつて無生むじやう忍にんに入る。今いま此こ界かいに於おいて念ねん仏ぶつの人ひとを撰せんし
 て淨土じやうどに帰かへる。」

是これを宗祖しゆその本地ほんぢたる勢至せじ菩薩ぼさつに例れいせば、親思おやおもひの子こが親おやの念おもひに育はぐまれ靈れいに生うまれ更か
 りて無生むじやうの悟さとりを得給えたまへり。親おやを離はなれて子この成長せいちやうすべき理りなければ靈れいが動うごき初はじむれば

親を愛する心を止めんとして止むべからざるに至るべし。

人間には肉の性と靈の性とありて、肉の感情に於て異性に対する愛は最も醜しき生命を有せり。世には恋愛の爲に身をも命をも惜まぬものあり、又失恋の結果自殺さへする者あり。古往今來恋愛の爲め懷殺せられ、癡愛の爲め悶死せし魂魄宙に迷ふもの幾干ぞや。又胸を焼き思を焦し、内に燃ゆる情の火より恋の詩と表はれ歌となり、随分百人一首杯を見ても恋の歌は少なからず。苟初の色にだに凭迄に身命を惜まざるに於けるを夫に比ぶれば、靈性が永恒の生命を共にする大愛の権化たる如來に對して、神の靈味に觸れ、無上の靈界の美人に接せんと、恋慕の念を生じ、一心に如來を見んと欲する恋慕の情の深き、身命をも惜まざるに至るは敢て怪しむに足らず。是を愛仏の恋慕と云ふ。肉の性が自己の情に適ひたる異性を最も深く愛する時は恋の爲に命さへ賭して我物にせんとす。

況や絶対無上の靈界の美人なる如來に、滿天滿地の愛を注ぎて恋せんと思ふ時は靈

性ある我等何ぞ愛慕の念を發さざる。弥々靈界の美人を見ん爲には益々恋愛の情が昂まり、遂には如来の靈に接觸して、それを我有に爲さんとす。然れども、それは容易の事に非ず、爰に恋が叶はぬ事なれば、寧ろ死するに如じと思はるゝ迄に到らざるべからず肉体に於ける子供の時には、世に母親ほど慕はしき物はなし、小兒は全精神を母に一任して依頼を懐けり。宗教心も亦然り、初心には小兒の母に於ける如く如来に依頼し、生死の苦海に沈みて永劫浮ぶ瀬のなき我等を救ひ給ふは如来の外に在まさじ。此小兒の如き靈性を養育して、成長なさしめ給ふは、大みおやのみなり。故に子が母を愛慕する如くすべし。然るに子女も成長するに随ひて、成年期に近づき、母の許を離れて独立せんと爲るに至れば、漸く異性を要求する自然の性情を有せり。宗教に於ける感情もそれに例する如き心を發す。如来は畜に苦界より救済を仰ぐのみに非ずして、自己の靈的感情の奥底まで満足を与へ給ふなり。宗教心が向上して如来の絶対的に円満なる靈格なることを信ずるに至つては、夫に対して欽慕の情を生ずるなり。又

如來は衆生の感情的最高最美の極みにまで誘導せんと欲して、美と愛との最上の相好を現す。是れ如來が衆生の心靈を開きて、真善美の極に到らしむる目的なり。感情を最上の美と愛とに為さん為なり。感情最美なるものは、如來を愛する心なり。如來を深く愛して、その大愛の中に、己が全体を没入して、如來の愛と自己の感情とを融合す。是れぞ如來無縁の慈悲として、我等を摂収同化し給ふ仏の力なり。我々の宗教心が成年期に至れば、愛慕の念を發して如來と同棲せんとして止まざるべし。是れ宗祖が「苟初の色ゆかりの恋にだに遇ふには身をも惜みやはする」と靈の愛の深きを詠み給ひし所以なり。

人の精神生活に三階ありとは前に演べたり。愛の感情にも亦三階に分けることを得。初めに天性より發る愛は肉体本位の我れなるが故に、愛する物も随つて卑し。只肉体に満足を得る物を愛す。即ち我妻我子、また肉の生活を資くる金銭財産等を無上のものとして愛す。就中、最も中心と為るものは異性に対する愛なり。

次に理性我になれば、高等なる理性より出づる愛なり。それは天性より発るものよりは広くして、人類其他の生物に対して迄も愛する仁慈とも為り、又は君を愛し国を愛し、乃至広く一切の人類を慈しむ愛ともなる。是等の美しき愛情は、世に所謂忠と云ひ孝と云はれ、自己の本心の愛より出づる眞の忠孝なり。愛国者が国の為には肉の幸福を犠牲にし、又人類を愛する衷心より、自己を忘れて尽瘁する仁人あり、これらは理性より出づる感情なり。又孔子が「賢を賢として色に易へよ」とは世には愛する好色の為に、己がすべてを献げて熱注するあり。若し賢人を愛すること好色の如くにせば、自分も賢人に愛化して賢人と為ることを得るは、是孔子が自己の衷心を告白せしと同じく、又哲学者杯が真理の知識を愛するには寢食を忘れて研究に腐心するを以て或る学者は「哲学とは知識を愛する学なり」と云へり。総て人は自己の衷心より物を愛するには、生命をも献ぐるを辞せず。否、愛を人の生命として活くるなり。之れ等は対象に高低あるのみ。

次に靈性より發する愛は最高等なる理想なり。宇宙最上の美と愛とを有する如來を愛す。如來は宇宙全体の至純至精至微不至なるものなり。この如來に接觸するものは、其靈性を開發せし人にして始めて接觸することを得。自己の情に契ふ肉体の異性に、愛を獻ぐることを悦ぶ如く、靈性は靈的異性とも云べき神即ち如來を愛す。是れ宗教的眞の愛なり。

愛てふ不思議な感情は、元來云何なる意義より生物に賦与せられしや。大親の聖意なれば衆生の小知を以て測ること能はず。若し試に云はゞ「愛の目的は生命を保護する天使なり」と。されば愛は生命なり。天性的に人が己れの身を愛し又生命を愛す。若し生命を愛する心無からんには、彼は自殺するならん。人は思想卑ければ卑き或物を愛する為に活きて、異性を愛する性情が賦与せられたるは、其種族の生命を保存する為なり。若し異性を愛する愛なかりせば子孫絶ゆ。肉の愛はすべて肉の生命保存より出づ。理性の愛は範圍極めて広し、或は國家を愛し民族を愛し人類を愛す。若し理

性の愛なかりせば、国家の生命民族の生命亡ぶべし。又賢人哲人杯が知識を愛する性情なかりせば、高尚なる學術真理の教は世に起らざるべし。宗教家は神即ち如来の真理を我生命として愛し、真理の光明の宣伝に命を獻げ、而して我と人と共に宇宙の大愛に繋りて生命を共にすべし。靈性の人は大靈の命を我として永遠の生命を愛し、此が為に或場合には肉の生命を犠牲にすることを辞せず。

靈性の愛は如来を我とする愛なれば一切の衆生を矢張り自分と同じ様に愛す。此愛無ければ衆生の麗はしき生命を失ふ。故に菩薩は自ら誓て衆生を度す為に愛情を捨てずと云ひ、此愛を進めたる終局は仏の無縁の慈悲と為る。また我らが仏に成るも仏を愛する性情を有するによる。若し仏を愛する心なかりせば、我らの愛は永久に亡びしならん。是れ愛の目的の極めて広き所以なり。

我曹は如来を離れては靈の生命なし。恰も太陽を離れし地球の如し。我らの心靈の金剛石に輝く光は仏日の反映なり。我はすべてに超て如来を愛す、如来は又我を愛し

たま
給ふ。

さて全体極楽を欣ぶ動機は那辺にありや。極楽の快樂無窮を聞いて、其樂を獲んが爲に極楽を樂ふや。將た弥陀の靈格を愛して其の慕しさに如來と共に在らんことを希ふや。卑近な例を以て云はば、某の女が某の家に嫁するに、其女が夫の人格を愛してそれに嫁せんとするか、又夫の人格に拘はらず家の財産とか家柄とかに望みを以て嫁せんとするか。前のは夫の人格を本位とし、後のは家財産を目的としたり。願生の動機に於ても、唯弥陀の人格を本位として生命を弥陀に投じ、弥陀と共ならば假令地獄の火坑をも悦んで入ると云如きは、弥陀の人格を本位としての願生なれども、只極楽の快樂を貪ぼりて欣ぶと云ふのは、愛樂目的の信仰なり。世間の相愛し合ふ兩名の仲に、仮令火の中水の底までも、彼と共ならば厭はずと云如く、愛する弥陀と共ならば、地獄の火の中に入り或は氷に閉ぢられても厭はざる決心を要すそこで無限の快樂を感じず。愛は生命なり。本心に弥陀を愛する中に於て最大の幸福と最上の満足と

を感ぜらるるなり。宗祖に對しても然り。宗祖は人中の弥陀なり。宗祖の人格を愛する処より宗旨をも愛するに至る。宗祖の人格を通じて弥陀の靈格に觸れ、弥陀の光明に依て自らの人格を形成するなり。自己が弥陀の靈格に同化する時は、十方界至る処として淨土ならざるはなし。故に弥陀の人格を愛慕し、如来と共に常にあることを欣ふなり。

弥陀を愛するは道德の源なり。道德は、經書の研究及修身学の講義にて暖なる道心は決して発らざるべし。我とまた有ゆる人との間に温熱ある慈愛の通ふ処よりして、眞実に人を愛すること我身と同じ様に感ぜしむる、是れ慈悲喜捨と云ふ仏子の心なり。我らが心の根底に横はる如来の大慈悲を我心とし、平等の愛に同化せられて次第に仏子の心を發達す。唯自分のみを愛する人は他を忘れ他を排し、知らずく不道德となるなり。故に眞に如来を愛して如来の心を我心と為る時に、眞の道德の心情は起るなり。如来は無条件の慈愛を以て凡てを摂め、温かなる懷ろの中に容れて、煩惱

の心をも美化して安和を与へ給ふ。如来は太陽の無為に照して地上の生物を愛育する如くに、永恒に大慈の光を以て衆生の心を徳化するなり。故に如来を愛して之に同化したる人の愛は、世の為人の為に最美の努力を為して、他人が毀らうが誉ようがかかる事には関せず、唯すべてを愛するより自己の職として竭すものなり。

弥陀を愛するは美の極みなり。有ゆる世界の魚を捨て妙を撰び衆生の惡を排して善を取り純粹の善至純の美を以て莊嚴するは弥陀の靈國なり。靈國とは清き聖意の現はれなり弥陀の聖意を離れて浄土はなし。其聖意とは大慈愛なり。愛てふ美の極が感覺的に現はれて光赫焜耀としては微妙奇麗なる浄界と為り、之を感情に享くれば熙怡快樂極りなき楽園と為り、其大慈愛の中に溶入する時は此処に在り乍ら実に清淨の靈感極みなく、歡喜と妙楽は油然として湧き出づるなり。彼の浄土は此大慈愛の全体の現はれにして、此処には如来を愛する理想のみに現はるるなり。如来に融合する時は、神は浄土に栖遊び、八功德池に心をすませば、調和冷煖にして自然に意に随ひ、神を

ひらき体を悦しめ、心垢を蕩除す。清明、激潔にして淨きこと形なきが如し。宝沙映
 てつて深しと雖も照さずと云こと無し。微瀾は廻流し、安詳として徐に逝て、波
 は無常の妙声を揚ぐ、其所応に随つて聞かざる者なし。乃至如来の愛に溶容たる心に
 は三塗苦難の憂なく、但自然快樂の音のみあり。彼の淨土は死後とのみ思ふ勿れ、如
 來の中に念を融け入れれば、經説は我心の实感とはなりぬべし。我として愛すれば斯く
 総ての階級に通じて、愛は生命にて、生命は愛にありと云ふべし。

総ての階級に亘りて相愛する異性を得れば、其愛する者を我物として夫婦同棲し、
 夫と生命を共に為んことを望む性情あり、肉体にては自己の情に適する者を愛して、
 夫を我有として同棲せんことを望む。理性には賢人を慕ふて止まず。靈性が靈界の神
 格を愛して我有とし、我生命をも獻げて一体不可離の關係を得ざれば止まざる情を發
 す、此れ靈の恋なり。肉の愛は生理に規定せられて、畢竟種族保存の自然より衝動す
 靈性が如来を憧憬するも、靈的衝動より発する高等なる感情なり。肉体が兩方の愛を

がったい。合体して新らしき生命を生む。子を産む如くに、靈性が如来を愛慕し靈応に感觸し、神秘冥合の妙用よりして靈き生命を生み、かくして聖子と爲る。此神秘的合一を得んが爲め、準備として発するは靈の恋なり。此靈の恋は最高尚にして、深遠に微妙不可思議なる感情にて、宗教的天才の胸中に熱烈に活動する力なり。彼は己が靈き生命の緒を神の愛に縛びて、幾重にもく結びつけ、いかなる事情の下にも永遠に繋ぎつて断絶することなきを樂ふ情なり。我は無上の最高者と結びて、永遠に割なき仲と爲ることを又なき幸福として自ら悦ぶに至る。如来は智慧と仁慈と及び万徳円かに備はりて微塵許りも欠点なし。斯る靈格が無上の愛を以て我を愛し給ふと思へば、我らは全生命を獻て彼に容られんことを欣ぶ。我はあなたの物なれば亦如来は我物なり此靈的結婚は永遠に離婚の患なき約束なり。かくて寢醒離ることなし。而して彼は何時も我為に有ゆる娯樂を与ふ。彼は無尽の持參金を以て我に来れり。我の無限なる心靈上の幸福は悉く彼が齎らし来る資なり。我の忍るとき彼は無量の慈を以て我を

有^なめ給^{たま}ひ、我^{われ}憂^{うれ}ひに沈^{しず}む折^{せり}は彼^{かれ}は無^{むげん}限^{げん}の福^{ふく}音^{いん}を以^{もつ}て我^{われ}を慰^{なぐさ}め給^{たま}ふ。我^わが日^{にち}々^くの作^さ業^{げふ}に非^{ひじやう}常^{じやう}なる力^{ちから}を与^{あた}へ、最^{もつと}も弱^{よわ}き我^{われ}に最^{あつと}も強^{つよ}き力^{ちから}を加^{くは}へ。我^{われ}は現^{げん}在^{ざい}を通^{つう}じて永^{えい}遠^{えん}に最^{さい}高^{かう}者^{しや}と同^{どう}棲^{せい}するこ^とを得^うるは無^{むじやう}上^{じやう}の幸^{かう}福^{ふく}なり。彼^かの傳^{みだ}大^{だい}士^じが、

「夜^よな^くく^く 仏^{ほとけ}を抱^{いだ}いて眠^{ねむ}り、朝^{あさ}な^くく^く 還^また共^{とも}に起^おき、語^ご黙^{もく}居^こ止^しを同^{おなじ}ふし、座^ざ起^き鎮^{ちん}へに相^{あひ}從^{したが}ふ、織^{せん}毫^{かう}も相^{あひ}離^{はな}れず、形^{かたち}と影^{かげ}との如^{ごと}く相^{あひ}似^にたり、仏^{ほとけ}の去^さ処^{ところ}を知らんと欲^{ほつ}せば唯^{ただ}這^{この}語^ご声^{しやう}此^{これ}なり」

孔子^{こうし}が「賢^{けん}を好^{この}むこと、色^{いろ}に易^かへよ」と。靈^{れい}性^{せい}に於^おても、靈^{れい}性^{せい}の發^{はつ}達^{たつ}せる仲^{なか}間^まの愛^{あい}情^{じやう}は古^こ今^{こん}同^{どう}様^{やう}なり。

古^こ今^{こん}の偉^い人^{じん}みな仏^{ほとけ}を慕^{した}ふ。宗^{しやう}教^{けう}の中心^{ちゆうしん}真^{しん}髓^{ずい}は感^{かん}情^{じやう}なり。真^ま摯^じに靈^{れい}の生^{せい}活^{くわつ}を求^{もと}むる人^{ひと}は靈^{れい}的^{てき}人^{じん}格^{かく}の如^に来^{らい}を慕^{した}ふて止^やまざるべし。されば教^{けう}祖^そ尊^{そん}入^に滅^{めつ}の後^{のち}已^{すで}に前^{ぜん}師^しに後^{おく}れ未^{いま}だ当^{たう}来^{らい}の弥^み勒^{ろく}世^せに出^いでず。此^{この}中^{ちゆう}間^{かん}に在^ありて人^{ひと}あるひは石^{せき}窟^{くつ}に入^{いり}て慈^{みろく}尊^{そん}の出^{しゆつ}世^せを待^まち、亦^{また}は龍^{りゆう}神^{じん}の身^みと為^{なり}て龍^{りゆう}華^げの暎^{あかつき}を期^ます。然^{しか}るに大^{だい}乘^{じやう}の門^{もん}開^{ひら}くに曼^まんで正^{まさ}に真^{しん}実^{じつ}の義^ぎを

彰す。縦令娑婆出世の仏陀を待たずとも西方の浄土に往かば弥陀現在して説法すと。
何ぞ徒らに無数の時間を失はん此法門開くるや大早に雲霓を望むが如く、文殊普賢を
首めとし龍樹天親等の諸大士、及び諸の賢聖衆より、乃至一切の階級に亘りて現在
説法の仏を慕ひ、浄土に望を期する者甚だ多し。又一方には法華真実の道に入れば、
必ずしも死後の西方に往かずとも、常寂光の浄土には常在説法し給へり。浄土遠か
らず一心に仏を見んと観じて、身命を惜まざれば此に現じて即ち説法すと。弥進ん
で弥不思議なり。現身のまま見仏を得る所以は、実には仏と衆生と本来真実の父
子なれども未だ吾等赤子にして親を知ることを能はず常に仏と共に在り乍ら見えず、
若し親の慈愛に育まれて靈性さへ開くれば、懐かしき御面を瞻むこと疑ひなしと。法
華經に説く処の本仏と云は、即ち弥陀無量壽尊の事なり。故に彼の西方の浄土の如來
と、吾らが此処に在て瞻むことを願ふ如來とは本来一体なり。

古今を問はず自分の麗はしき宗教心が發達すれば靈的人格の如來を欣慕して忘るる

こと能はざるに至る。実に如来の御図らひは不可思議なり。縦令命を捨つるも、現世に於て仏を瞻んことを恋慕ふものには、此処に現れて説法し、また此世にては迎も及ばずとて、彼処に到りて現在説法の会に列らんと望む者の為には、彼処に於て瞻上ることを得。実に如来の在まさざる処なきが故に、父子相見の機縁熟したる処に於て面見することを得べし。

如来の麗はしき相好は愛の現はれなり。人間同志にても、自分が愛する人に向ふ時は、麗はしき顔を以て表情す。如来が衆生を深く愛し給ふことは、最も微妙に最も美麗に表現し給へる相好を観るも察し奉ることを得べし。其所以は、如来は本法身智慧の身に於て、相や形を超越したる靈体なれども、深く衆生を愛する愛の表現より、無比の靈妙なる色身、美麗なる尊嚴なる相好と現はれ、衆生の心を排発して愛慕の心を生ぜしむ。

經に「如来は八万の相好より無量の光明を放ちて普く十方を照し、念仏の衆生を撰

取して捨給はず」と。如来は満天満地の愛を以て衆生を抱いて離さず、斯る宇宙に上なき如来が、凭までに我を愛念し給ふに、我ら争で愛慕せざらんや。如来の妙色相好の麗はしきは衆生を愛し給ふ心の現はれ、とは何を以て知るとならば、經に「仏心を見る者は仏心を見る仏心とは大慈悲是なり」と。斯く我らを愛し給ふ内心の麗はしさが、凭く美しき相好と現はれて、我らを誘引し給ふと想へば、いよいよ麗はしきなり。之に依て如来の靈体に接せんとの心も發動す。彼のプラトールが理想の愛をのべて「美は天上の容姿に伴ひて輝きつつある者、彼若し地上の現前に現はれ来ると雖も是の最も純潔なる感覺の隙より其清き光を発する者。若し人世に生れて素朴にして、且つ前世に於て常に光榮を觀得したりし人は、其神的清貌を見て神声端単なる相好に驚愕せざるはなし。先づ一瞥の下に悚然として身戦き、亦宿世畏敬の余情は自から油然として湧き来り、恰も神像に對する如く身を投じて之が犠牲たることを辞せざるべし。」とは蓋しプラトールが理想の愛の消息を洩らせし如くに、宗教的天才の神的恋念は、常

に理想の美天国に逍遙し、晃耀赫々たる光明は胸臆に往来し、其麗はしさ其馥ばしさ、何物か之に比類すべきものぞ。吾人は宗教的偉人の胸裡に燃えつつある靈の恋の熱度の高さと、神的感情の深遠なるとは、世の最高理想の極みなりと思ふ。

教祖世尊が六根清らかに、姿色永へに麗はしく在せしは、靈界に輝ける弥陀を憶念しつゝある反映にあらずやと信ず。感情的愛の信仰は、靈界なる人格的の如来を求めて止まず、而して靈界に輝ける人格的の愛の現はれなる相好の美しき如来の愛の中に融け入るほど微妙なる靈感はなからん。

宗教的美の感情また靈的理想の欠けたる人には偉大なる宗教家の理想神に憧がれ微妙なる靈感の如きは想像にも及ばざるならん。聖龍樹尊者は、自己の理想に憬がれし如来を讚め称えて、「面善円浄にして満月の如く、両眼は清きこと青蓮華の如し、声は天鼓俱翅羅の如し、故に我れ弥陀尊を頂礼す」と、乃至数多の頌を以て如来を讚美したるは靈界の美愛を慕ふ処の余滴ならずや。

聖觀音の頭に弥陀を戴けるは、常に如来を憶念して離れざる愛慕の表示と信ず。聖善導は「弥陀は真金色にて円光徹照し、端正無比なる相好を永へに憶念し給へ」と。また「衆生仏を憶念すれば仏も衆生を憶念す」と。また「弥陀の応身籠々として常に目前に在り」と。亦聖源信は、「ぬれば夢さむればうつつ束の間も、忘れ難きは弥陀の面影」と。斯の偉人等が靈的憧憬の水満てる処に、愛の権化の如来の月影は永しへに宿りしにあらずや。如来の大なる愛より湧出でて吾胸裡に満てる愛の恋の水には麗はしき日の如くに輝ける相好が映現す。宗祖の「我は只寝てもさめても靈界の美人弥陀の麗はしき慈愛の顔を見まほしく、其恋しさはいつとて心の妻に懸らぬ隙もあらぬ」とは、いかに愛慕の念の深きことよ。尚進んで「苟初の色事にさへ身をも命をも忘るるに、況して永恒にまで添うて幸福を共に為る弥陀を慕ふに、仮の身や命など何ぞ惜きことあらん」。是れぞ法華經の「一心に仏を見んと欲して身命を惜まず恋慕するものは、慈愛の権化なる仏の麗しき相好を以て出でて法を説て聞かすなり。のみな

らず、還て仏の方よりも衆生を愛念して待ちつ焦れつ、何時かな彼を度せん、何にせば彼は我意に随ふらんと、忘るる間なく念じ在す、と。憶ひ憶はるる両方の、念ひと念ひと能く合致する処に、永遠に離る能はざる割なき仲を形成するなり。宗祖の斯の如き、弥陀に対する靈的愛慕の結晶が靈的の金剛石と化し、弥陀の光明が其宝石に反映して「明照」の嘉号とも表はれしなり。(宗祖の皮髓より)

欲望（意思の信仰）

意思の信仰を通じて菩提心と云ふ。菩提心とは無上大道徳心と云ふこと。此に二義あり。一に願作仏心、二に願度衆生心、前者を向上心とし後者を向下心とす。また前者を往相とし後者を還相とす。菩提心とは菩提とは無上菩提とて宇宙大道無上覚の仏に成るべき道である。仏に成らんには仏は宇宙全体が仏であるから、一切衆生を共に円満に完成せんとの願望である。初めに自己が仏に成りたいと云ふのは、自分が仏に

成らなくては、総ての人々を仏に為る事は出来ぬ故に、論註に我仏に成り度いとは一
切衆生を度せんが為めに一切衆生を度せん目的は一切衆生と共に円満に完成して、永
遠の安寧を得たい為めである、と。此く仏の志願である。此の志願を満たしめんが為
めに全生全力を献げて聖意に仕へるのである。やはり之がミオヤの聖意である。聖意
を自己の意と為るから凭の如きの大道心と成るのである。愛の信仰を花とすれば、欲
望の信仰は実を結ぶのである。全人格を完成するに在る。聖子の分を尽すにある。
願作仏心、また向上心、また往相と云ふ。願とは我仏に成り度いと云ふ志なり。
仏とは円満完全なる靈格である。是ミオヤより受けたるみ子としての靈我実現せんと
の欲、自己の性を遂げ伏能を開発し有らん限りを尽して完成せんと欲望である。伏
能は行為に依て実現す。総て行為働かざれば善悪共に発達せぬ。靈性は自身の中に伏
して自由を求む。自分の中より発せんとする靈に活きんと欲する性能を持っている。け
れども大法に依らざれば発現は出来ぬ。

心霊は自身の中に自由に実現せんとして居る。夫を実現するのは行為である。人十度すれば、己れ百度せんと一心不乱なれば何事か成らざらん。己れの力を竭して働けば自己が益々顕明と成る。自己が発達すれば、する程自己の全体が顕はれて来る。視よ梅の種子から芽を出し、蕾から花、花から実と云ふもつまり本の種子の中に凭塵な物が伏在して居るから、外貌からは不明であるが己が力を竭して働き出して、芽を吹き蕾や花とも現はれたのである。霊の生命も、本は動物本能の皮殻の中に仏性を種子として有つた間は狗子仏性として何の価値も認められぬ。一心不乱に専精努力の結果に於てこそ自己の眞価が判明と現はるる。如何に聖人として聖人の徳を顕はすには矢張り全身全力を竭し生命を賭してこそ始めて聖徳が顕るる。何の処にか天然の釈迦自然の弥勒あらん。実に自己靈性を顕はさんが為めに、一切の幸福を犠牲にし有らんに限り全力を尽してこそ釈迦の聖徳が顕現なされた。又基督教徒はキリストは生れ乍ら神の子であると云ふ、けれども、ヨルダン川のヨハネに至誠心に洗礼を求め、野に四

十日断食して全力を竭して肉をせめ靈の活現を望んだではないか。

欲生心。吾人は人の子なると共に如来の子である。已に人の子としての人の心は沃地に蔓延せる雑草の如くに我愛我執の人心に発達したればミオヤのみ子たる靈性は恐らく荒蕪して顛動しないがミオヤの大悲の恩寵に喚起されて初めて自覚の芽となつた

ミオヤは欲生の心を起せと命ぜられたので、初めて芽と為つた自己の靈的生命は恩寵の暖気に暖められて内面より不斷に活動して進めば進む程新しい世界が顕現する。聖き道徳心は現はるゝ。種子が芽を出して幹から枝、枝に条、条に葉と云ふ様に次第次第に発展し増し増し増すれば益々花や果を結び、果を結べば、また新しい生命を幾らとなく分身して益々多々に分れて、何れも麗を競ひ美を争ふて、また芳烈を流す。

吾人の靈的生命も大なるミオヤの大地の上に根底を有て居るから、無限の養分は常に注がれて而して心靈性の枝葉に真善微妙の心靈の花開き香氣普ねく十方に流れ嗅ぐ者をして清きに復せしむ。心靈の樹已に成長する時は一切の煩惱汚穢の心意も益々そが

為に肥料とされる。彼をして同化力を以て新緑の葉とし瀾漫たる花の色香と変化せしむ。あの穢しい物も桜木の食物と為りて、麗き花が穢れたあくたの後身とは誰か知らん。我度が貪瞋の煩惱の汚も靈的生命の犠に献る時は還つて全心まで靈化して靈の生命を莊嚴する美德とは成るなり。

我は仏の子。もはや我は人の子ではない如来の子である。ミオヤの有ゆる靈性は自己を通じてミオヤから自由に顕現して来る。仮令ミオヤの身心万徳は全宇宙に遍するも、我此身心を通じて世に顕現するのである。それが自由である。仮令世の腐敗極れる社会に在りても泥中の蓮の如く自己に具有する靈性は自由に顕はれて来る。自己の律法と秩序とは已に立ち已に伏能を有らん限り活動せざれば靈の面目は顕はれぬ。行住座臥の常恒の活動から不断に顕はるゝ善と美と靈とを以てみ子の靈性を莊嚴するに全人格を發揮すべきである。靈に生きんと欲する生命は靈の活動を意味するのである。靈が大なれば大なる程自己の大なるを自覺す。自覺は必ず行爲に現はさねば居られ

ぬ。然れども靈の生命はミオヤが愛の無限の泉源より自己の心に湧出する甘露の味を嘗めて不死の生命に入つた人にして始めて眞の生命ある行為が出来る。靈に活ける人は肉につきての悲痛や束縛から已に解脱して居るから如何なる事も敢て意に介せぬ。

自己の成熟を欲望す

人生の一大事は靈に活くる為である事を自覚し靈の生命を成熟せんが為めにて肉の苦痛や艱難は甘んじて犠牲にせざるべからず。靈のミオヤに如何なる場合にも離れては靈の生命は支持出来ぬ、成熟出来ぬ。既に成熟すればミオヤの靈性は我に具備す。今喻を以て演べんか。椅子の果を視よ。彼は親の枝にミツシリと執まつて、已に花、蕾の折から雨が降うとも、また風が吹うとも毫も側眼も振らず一生懸命に自己を完成せん為めに成熟せん為めに全力を以て養分を吸収し決して放れまいとして、彼は生きんと欲する力の強い事、其の力の強い意志の剛いから、已に成熟して新生命を造り出

すこととなり、而して能く内の種子が熟する時は外貌も赤色を呈して美しくなる。

また肉も大に甘くなる。甘く為つた時分種が熟したのである。吾人の靈性もいよく信仰成熟すれば法喜禅悦の妙味を覺へ、えも云はれぬ靈感を得らる。凭く成らんにハミオヤに一に執着し何時も引附いて、我心靈は椅子の実の枝を放さぬ様に、大なる靈と離すこと出来ぬ運命を以て自己の靈格を完成せんが為には、自己の全力を竭して努力する。勇猛に精進して益々靈我を実現する。椅子の熟したる実に生命ある如く、吾人の信樂成熟したる靈に生命あり。熟したる果に其の持たる真味が味はるゝ、半熟の実は真の甘味がまだ現はれぬ。実が成熟せんが為めには雨にも風にも吹き落されぬ様について居た如く、人も如何なる場合にもミオヤの靈意に執意して奮闘努力する。肉の苦痛や生の重荷は是れこそ宝である。

靈の火が熾んに自己に燃えつゝある時は、煩惱の薪も還て火を増進せしむる材料と爲る。ミオヤの慈悲を離れたる人の胸には、常に三毒の炎断ゆることなく、慈愛に満

ちたる人の胸には火は暖かに愛と共に燃つつあり。

淨仏国土の願行

仏徒は菩薩である。菩薩は淨仏国土の願と行とを以て任務とす。淨仏国とは其の国を清淨にすることにて、例へば能く業に勤勉して富を為せば家屋等を調ふるが如く仏子能く万善万行を以て公衆に及ぼせば精神的に美風の風俗を改善し善良の民を造る。人生は一切と共に真善美の靈界に向上する光明の大道である。淨仏国土を実現させんとすの働きである。靈界は私有物に非ず、一切と共に安寧を得る處、聖意の実現する處、人々聖意を己が意として専心努力し万善万行を以て各々其の身を莊嚴し其國を清淨にす。ミオヤの淨土は佗に求むべからず。各々無明の私を捨て光明の聖意に靈化する時は淨き国土は顯はれん。淨き御許、涅槃に到らんには必ずしも十萬億土の彼岸のみ求むべきでない。凡夫が無明の私を去りてミオヤの聖き聖意に這入つた時は即ち

顕はれん。凡夫の業識が自ら穢悪の世界と自ら感じて居る。若し神聖と正義との聖意を体して聖意の現はるゝ様に実行する時は此処に在りて清淨国土は現はれん。

目的の事業には常に歓喜あり

人生の帰趣は真善微妙の靈地に到達するに在り。或は涅槃界、また神の国と云ふ、至幸と至徳と一致する処を云ふ。帰する処ミオヤの靈き光明に入りたるなり。善美の靈界必ずしも十萬億土を隔てず。若し凡夫の私心を離れてミオヤの聖意を以て自己の意とする時は此処即ちミオヤと共である。ミオヤを隔つる者は自己の無智である。若し靈性顯現すれば去此不遠、此処に淨き國は感ぜられん。

現生は如来の中に在りながら靈性幼稚にして自ら知ることが出来ぬのは長者の子が財宝無量の家に居りながら小児の如く財宝の価値は認むることが出来ぬ。此の生はミオヤの所有を我れに得て靈界を実現せんとの生とすれば之を実現せんが為には如何な

る行為も喜んで努力する。ミオヤと共に無限の宝に満ちたる靈界に生活せんと欲望から働く時は如何なる艱難困苦も敢へて苦と観ぜず。人は全く自らの欲望の爲めには他人より苦の如くに見ゆることも苦と感ぜぬ。例へば農夫が秋の豊饒なる稻米を収めんと欲望から炎熱中に汗を流して耕業を勤むること敢へて苦とせず。心靈格を完成せんと欲望より出る業は如何なる業務も喜んで耐忍得らる。艱難困苦は自己の靈を精練して名剣たらしむる目的の爲めには益々勇氣を鼓舞して努力し得る。

釈尊、菩薩の因中に六波羅密を行じ諸の万善万行を以て仏土を莊嚴し給へり。世の人産業に勤勉して全村各産業をつとめ稼殖に励む時は其村落は豊富其の程度を高める如く、人と共に此土に理想の淨国を実現せんと目的これ菩薩の業である。

人生を充実せしむ

自己の内容を豊富にするには人格を豊稔ならしむるにある。諺に稲は能く稔るほど

穂を垂れると。人が諸の煩惱即ち忿恨憎貪慾、または傲慢を以て己に充しむるものは実に卑劣なる人格である。体が脂肪太りの病的なるは実に不健全である如く悪徳や煩惱の強きは強き程人格が下に墮落する。秤の善悪に悪の方が重きは人格の平衡から遠くなる。一方に正善は益々進むに随つて益々人格を豊富にす。

ミオヤの子たる靈の性格を円満にし充実せしむるのが生の目的である。嚮きにも述べた意志は靈性が伏して能く勇猛に勉勵するに從て生が充実する。精を出すとは己に有てる精力を絞り出すことである。汗と油とを以て己が自行を有らん限り絞り出して初めて生が実現する。如何に天稟の資材を有すにも奮闘努力せざれば其の材を完成することは出来ぬ。世間に幼い神童と呼ぶる者も壯年にして平凡に化するあり。弱冠にして鈍愚の如きも勤勉の結果偉人と成れるあり。人生を充実せしむるは自己の有らんと限の力を絞り出す処にある。

至誠心から聖意に適ふ業は自己を充実せしむる。光明なき虚偽闇黒の迷妄から働く

業は根底に誤つて居る。私慾より為す業は靈性を完成する業でない。靈的光明中に身口意の三業が不斷の流れに依りて自己を充実せしむ。一日一夜八億四千の念あり念々成るべく迷妄の中に葬り去らぬ様に人類は佗の動物が本能的に働くより已上の事業を為ねばならぬ。人は靈性に依て働くべき責任が重い。権利が強き程随て責任も重大である。文明に進めば進む程責任が重くなる。

我等は仏の子である。菩薩である。經に不請の友と為つて群生を重担として度せよと命ぜられてある。人間は社会を重担として負はなければならぬ使命を有て居る。此を尽す処に自己が充実する御子の光榮が得らるゝのである。

聖子のつとめ

我等はミオヤの子である。子としての我等は社会を開拓し世界を重担として負はなければならぬ使命を有てゐる。恰も大造化が常恒に建設事業を一切の処に於いて行つ

て居る様に人間は建設したり又た破壊したり、積んでは散らし、また法律を成り、また之を棄てる等種々の業を為して造化の模倣をして居る。矢張りミオヤの子として親の所為を業として休まぬ。円満なるミオヤの子として親の完全なる如くに完全ならんとして不断に自己を改革し、改造し、活動して而して現在の我の不完全を完全に進めたいと欲する処、自己の理想を実現せんと欲する処に仏子の理想あり。人生は人の生涯を尽して階級的に完成せんとする行程に過ぎぬ。一歩進みてはまた自覚の理想を高め益々自己の活動範囲を拡張し、欲して止まざる処に御子の前途は望ますく大に樹のますく増大する如くに道徳的に増進すべき運命を有するのである。若し唯人の子の如く自ら傲挙して偉大なりと謂ひ、既に足れりと思ふ如きは御子の志に在らず若し夫れ自ら偉とし橋慢と弊と懈怠に陥落せば已に靈に死し人の子のみにてまた靈の御子の分あるなし。自己は常に不完全の故に完全たらんと欲望なかるべからず。